

阿志岐城跡

阿志岐城跡確認調査報告書

(旧称 宮地岳古代山城跡)

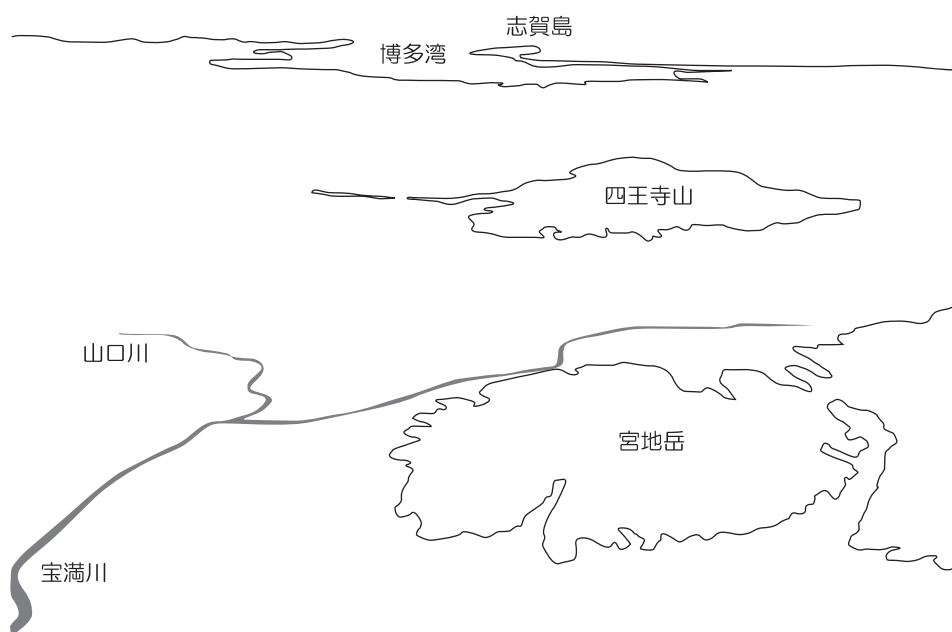
筑紫野市文化財調査報告書第92集



宮地岳上空から福岡平野を望む

2008

筑紫野市教育委員会



中表紙説明



1. 宮地岳全景（北西上空より）



2. 阿志岐城跡全景



1. 宮地岳全景（北側より）



2. 宮地岳山頂付近より大宰府政庁・水城を望む



1. 第3水門全景



1. 第3水門全景（北西から）



2. 第12トレンチ列石検出状況（正面から）

1. 第3水門東端部



2. 第3水門西端部



3. 第3水門石罫
切り欠き加工





1. 第12トレンチ
列石検出状況



2. 第12トレンチ
列石前面柱穴痕



3. 第12トレンチ全景

1. 第12トレンチ
南壁土層全景



2. 第12トレンチ
北壁列石前面土層



3. 第12トレンチ
南壁地山成形面





1. 第12トレンチ
南壁土層



2. 第12トレンチ
版築土層突き固め
痕跡



3. 第11トレンチ全景
(正面より)

1. 第11トレンチ
列石検出状況
(正面より)



2. 第11トレンチ
南壁土層全景



3. 第11トレンチ
北壁土層全景





1. 第11トレンチ
列石検出状況



2. 第11トレンチ
土層正面土層



3. 第11トレンチ北壁
土層前面成形状況



1. 第11トレンチ列石前面テラス検出状況



2. 第22トレンチ全景



3. 第22トレンチ列石検出状況（上から）



1. 第22トレンチ
南壁土層全景



2. 第22トレンチ
南壁土層



3. 第22トレンチ
列石前面土層

序

筑紫野市は、福岡平野と筑後平野とを結ぶ中間地域にあり、往古より交通の要衝として栄えてきました。

古代には大宰府政庁がおかれ、その北に大野城、水城、南には基肄城が築かれたことなどからみても、当地の重要性が高かったといえます。

平成11年3月、民間の研究者によって発見された阿志岐城跡は、列石や土塁、石塁など古代の山城に特有の遺構が備わり、全国で22例目の古代山城跡であることがわかりました。

本市では、この貴重な遺跡を永く保存していくため、平成12年度から平成19年度にかけて文化庁および福岡県の補助を受け、山城跡の範囲確認を目的とした調査を実施してまいりました。

本書は、確認調査の成果をまとめたものであります。この報告書が、阿志岐城跡の保存、整備に資することができれば幸いです。

おわりに、調査に快くご協力いただいた地権者の方々や、地元中阿志岐区の皆様、また、長年にわたってご指導をいただきました調査指導委員の先生方、文化庁、福岡県教育委員会の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成20年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 高 嶋 正 武

例 言

1. 本書は、筑紫野市教育委員会が実施した筑紫野市阿志岐1番433外に所在する「阿志岐城跡」確認調査の報告書である。
2. 遺跡発見から本報告書刊行までの間、事業名称として「宮地岳古代山城跡」を仮称として使用した。遺跡名称決定の経緯については、第4章第1節を参照されたい。
3. 確認調査は、平成12年度から平成18年度まで実施し、筑紫野市教育委員会 教育部（現）文化振興課文化財担当の草場啓一、渡辺和子、山村淳彦が担当した。
4. 踏査及び確認には、調査担当者が行ったほか、筑紫野市教育委員会 教育部（現）文化振興課文化財担当の小鹿野亮、吉田高穂、（現）博物館担当の奥村俊久が協力した。
5. 本書に掲載した遺構実測図は、調査担当者のほか、小鹿野亮、吉田高穂が作成した。
6. 遺構図面の整理、製図は調査担当者が行い、朝日航洋株式会社、九州地理情報株式会社、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。なお、第11及び第12トレンチに係る製図、遺物の実測については小鹿野亮が行った。
7. 本書に掲載した地形測量図は、朝日航洋株式会社が空中レーザー計測システムによって1/500の数値地形モデルを作成した。また、周辺地区については、筑紫野市都市計画課が作成した1/2500の都市計画図と合成した。合成箇所については付図「阿志岐城跡全体図」中に一点波線で明示した。
8. 城域の延長距離及び面積は、CADソフトによる自動計測により算出した。
9. 遺構及び遺物の写真撮影は、草場啓一が行ったほか、（現）有限会社文化財写真工房、有限会社空中写真企画が撮影した。
10. 航空写真は、朝日航洋株式会社、有限会社空中写真企画がセスナ機により撮影した。
11. 本書に記載した座標は、世界測地系に基づく。
12. 本書に記載した標高値は、海拔高である。
13. 遺構図の方位は、座標北（G.N.）を用い、磁北（M.N.）の場合はその旨記した。
14. 本書における土層の色調については肉眼観察に基づいて『新版標準土色帳』（農林水産省農林技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所監修）に準拠して表示した。
15. 本書の執筆分担は文末に記すこととし、特に記載のないものは全て草場啓一が執筆した。
16. 本書の編集は、草場啓一が行った。

凡 例

1. 本書では、基底石、列石、版築土塁を一体のものとして「土塁」とし、連続する場合は「土塁線」と表現する。
2. 石材を二段以上積み上げたものを「石塁」とし、谷部に位置する石塁を機能から「水門」と表現する。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	2
第3節 調査の経過	4

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

第3章 調査の内容

第1節 調査の目的と概要	7
第2節 東側城域の調査	9
第3節 城域正面の調査	23
第4節 西側城域の調査	28
第5節 山頂部周辺の調査	32
第6節 出土遺物	34

第4章 総括

第1節 城名についての検討	35
第2節 阿志岐城跡における版築土塁の観察について	39
第3節 阿志岐城跡確認調査の総括	45

第5章 結語	49
--------------	----

図 版 目 次

巻頭図版—1	1. 宮地岳全景（北西上空より） 2. 阿志岐城跡全景
巻頭図版—2	1. 宮地岳全景（北側より） 2. 宮地岳山頂付近より大宰府政庁・水城を望む
巻頭図版—3	1. 第3水門全景
巻頭図版—4	1. 第3水門全景（北西から） 2. 第12トレンチ列石検出状態（正面から）
巻頭図版—5	1. 第3水門東端部 2. 第3水門西端部 3. 第3水門石塁切り欠き加工
巻頭図版—6	1. 第12トレンチ列石検出状況 2. 第12トレンチ列石前面柱穴痕 3. 第12トレンチ全景
巻頭図版—7	1. 第12トレンチ南壁土層全景 2. 第12トレンチ北壁列石前面土層 3. 第12トレンチ南壁地山成形面
巻頭図版—8	1. 第12トレンチ南壁土層 2. 第12トレンチ版築土層突き固め痕跡 3. 第11トレンチ全景（正面より）
巻頭図版—9	1. 第11トレンチ列石検出状況（正面より） 2. 第11トレンチ南壁土層全景 3. 第11トレンチ北壁土層全景
巻頭図版—10	1. 第11トレンチ列石検出状況 2. 第11トレンチ土塁正面土層 3. 第11トレンチ北壁土塁前面成形状況
巻頭図版—11	1. 第11トレンチ列石前面テラス検出状況 2. 第22トレンチ全景 3. 第22トレンチ列石検出状況
巻頭図版—12	1. 第22トレンチ南壁土層全景 2. 第22トレンチ南壁土層 3. 第22トレンチ列石前面土層
写真図版—1	1. 宮地岳山頂付近より基肄城を望む 2. 宮地岳山頂付近より宝満山を望む 3. 第5地点列石全景
写真図版—2	1. 第5地点列石（西から） 2. 第4地点列石全景 3. 第6地点列石
写真図版—3	1. 第7地点列石全景 2. 第7地点列石前面覆土状態 3. 第7地点より第6地点方向を望む
写真図版—4	1. 第2水門遠景 2. 第2水門前面 3. 第2水門全景
写真図版—5	1. 第12地点土塁（南より） 2. 第12地点土塁（北より） 3. 第12地点土塁（正面より）
写真図版—6	1. 第13地点列石 2. 第14地点列石 3. 第1水門石塁
写真図版—7	1. 第1水門遠景 2. 城域外東側尾根現況

写真図版—8	3. 第14トレンチ掘削状況 1. 第21地点土壘天端現況 2. 第23トレンチ列石検出状況 3. 第23トレンチ列石前面検出状況
写真図版—9	1. 第27トレンチ調査前現況 2. 第27トレンチ調査後 3. 第24トレンチ露頭石検出状況
写真図版—10	1. 第3地点土壘天端 2. 第2地点土壘全景 3. 第2地点土壘近景
写真図版—11	1. 第3地点土壘全景 2. 第3水門天端落石状況 3. 第3水門東端部拡大
写真図版—12	1. 第3水門側面全景 2. 第3水門石壘西端部控え積み状況 3. 第3水門石壘挟り込み加工石
写真図版—13	1. 第3水門西端部最下部 2. 第3水門石壘切り欠き加工① 3. 第3水門石壘切り欠き加工②
写真図版—14	1. 第3水門石壘切り欠き加工③ 2. 第3水門石壘切り欠き加工④ 3. 第3水門石壘切り欠き加工⑤
写真図版—15	1. 第3水門石壘前面落石状況 2. 第3水門石壘崩落石 3. 第3水門前面採集粗割剥片
写真図版—16	1. 第3水門石壘転落石(正面) 2. 第3水門石壘転落石(上面) 3. 第3水門石壘転落石(側面)
写真図版—17	1. 石切場全景 2. 石切場花崗岩露頭 3. 石切場切り出し跡
写真図版—18	1. 石材散乱状況 2. 石材切り出し残材① 3. 石材切り出し残材②
写真図版—19	1. 矢穴跡が残る石材 2. 石切場南側尾根主稜線 3. 第29トレンチ全景
写真図版—20	1. 第30トレンチ全景 2. 第31トレンチ全景 3. 第32トレンチ全景
写真図版—21	1. 第33トレンチ全景 2. 第34トレンチ全景 3. 第35トレンチ全景
写真図版—22	1. 馬の背状鞍部土壘全景 2. 第37トレンチ全景 3. 第37トレンチ土壘断面
写真図版—23	1. 花崗岩の露頭①(第32トレンチ南) 2. 花崗岩の露頭②(第30トレンチ東南) 3. 花崗岩の露頭③(第30トレンチ東南)
写真図版—24	1. 第3水門遺物出土地点 2. 第3水門遺物出土状態(遺物No.2) 3. 第3水門遺物出土状態(遺物No.3) 4. 第3水門下位表土中からの出土遺物(岩盤直上)
写真図版—25	1. 第3水門下位表土中からの出土遺物(外) 2. 第3水門下位表土中からの出土遺物(内) 3. 第3トレンチ表土中の出土遺物(左:内面、右:外面)

挿 図 目 次

第1図	阿志岐城跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)	折図
第2図	阿志岐城跡調査箇所図 (1/5,000)	8
第3図	東側城域トレンチ配置図	10
第4図	第2地点土塁実測図 (1/80)	折図
第5図	第11トレンチ実測図 (1/40)	12
第6図	第11及び第12トレンチの版築土塁と地山切土との関係模式図	13
第7図	第11及び第12トレンチ付近の土塁断面形状	14
第8図	第11トレンチ北壁土層実測図 (1/20)	15
第9図	第11トレンチ南壁土層実測図 (1/20)	16
第10図	第12トレンチ南壁土層実測図 (1/20)	18
第11図	第12トレンチ実測図 (1/60)	折図
第12図	版築土層に見られる凹凸痕跡 (第12トレンチ土層)	19
第13図	版築土層に見られる凹凸痕跡 (第12トレンチ平面)	20
第14図	古代道に見られる凹凸痕跡	20
第15図	凹凸痕跡の径	20
第16図	石材加工法概要図	22
第17図	第3水門実測図 (1/80)	折図
第18図	第2水門実測図 (1/80)	24
第19図	第12地点土塁実測図 (1/80)	26
第20図	第1水門実測図 (1/80)	27
第21図	西側城域トレンチ配置図	28
第22図	第16地点土塁実測図 (1/80)	29
第23図	第22トレンチ土塁断面実測図 (1/80)	31
第24図	第22トレンチ版築土層実測図 (1/40)	31
第25図	第3水門等出土遺物	34
第26図	御笠地区遺跡A地点掘立柱建物跡	36
第27図	御笠地区遺跡A地点から宮地岳を望む	36
第28図	阿志岐万葉歌碑	37
第29図	群生する蘆原から宮地岳を望む	38
第30図	代表的な版築土壌	40
第31図	第11トレンチ北壁土種分別図	41
第32図	第11トレンチ南壁土種分別図	42
第33図	第12トレンチ南壁土種分別図	43
第34図	土塁構造模式図	45
第35図	阿志岐城跡俯瞰図 (CG) 御笠地区遺跡A地点付近より	48
第36図	阿志岐城跡俯瞰図 (CG) 太宰府市高雄付近より	48
附 図	阿志岐城跡全体図 (1/4,000)	附図

表 目 次

第1表	凹凸痕跡径の集計表 (集計結果)	20
第2表	凹凸痕跡径の集計表 (出現頻度)	20
第3表	版築土中に認められる凹凸痕跡の径 (突き固め痕跡)	21
第4表	第11・12トレンチにおける積み土方法の類型と版築土種	39
第5表	積み土方法分別表	44
第6表	阿志岐城跡主要箇所座標・経緯度一覧表	47

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

阿志岐城跡は、平成11年3月に古代山城研究会々員中島聡氏（大阪市在住）によって発見された古代の山城跡である。

中島氏は、古代大宰府の防衛にあたり「羅城」が形成されていたのではないかと想定に基づき大野城、基肄城、水城に連なる第四の城を求めて宮地岳山麓を探索した。3月21日、宮地岳南麓の山家側から入山し、終日探索したのち帰路につく途中露出していた列石（報告書中の第12地点）を発見した。

翌4月10日、所属する古代山城研究会の会員と現地調査を行い、列石と遺存状況が良好な土塁線を確認し、谷部では水門と想定される石塁を発見し、筑紫野市教育委員会（以下、市教委）に報告した。

一報を受けた市教委は4月12日、福岡県教育委員会文化財保護課ならびに九州歴史資料館調査課職員とともに現地踏査を行い、土塁を伴う列石と石塁を確認、その態様から古代の山城跡であると判断した。協議の結果、当面の仮称を「宮地岳古代山城跡」として地権者並びに地元への報告を兼ねた説明会を中阿志岐公民館で5月22日に開催したのち6月24日に報道機関に発表した。

その後、遺跡の範囲を確定するため、平成12年度より文化庁の国・県補助金を受けて「範囲確認調査」に着手した。平成13年には、市内在住の秀嶋龍男氏が、現地踏査中に城域推定線の東側谷部で石塁（報告書中、第3水門）を発見した。

このような状況の中で、宮地岳古代山城跡発見の以前に九州電力株式会社（以下、九電）によって宮地岳を東西に横断する高圧送電線用鉄塔の建設計画が決定されており、用地買収等が進行していた。このことについては、平成6年5月に九電より「北九州幹線鉄塔建設計画」として、市教委に事前協議がなされていた。平成8年5月、市教委に対し「文化財の所在の有無について」の照会がなされ、同6月に建設予定地の現地踏査を実施した。現地は檜・杉の保安林と雑木林で地形や地表面の観察を行った結果、No60・No61番鉄塔予定地については遺跡を確認できなかったことから、鉄塔建設に支障がないと判断し回答した。これに基づき九電は地権者と用地買収の交渉に着手し、山城跡が発見された平成11年には概ね用地買収等が終了していた。

このような状況の中で山城跡が発見され、城域の推定線上に位置していることから緊急に九電と協議をもち、古代山城跡発見の経緯を説明すると共に、鉄塔建設予定地が山城跡の推定範囲内に位置しており、①山城跡の遺構や関連する遺構が発見される可能性があること。②山城跡が確認されれば、遺跡の重要性から鉄塔建設が困難であることを伝え、九電からは早急な確認を求められた。

これを受けて平成11年8月に確認調査を実施し、No61鉄塔予定地では遺構は確認できず、No60鉄塔予定地では石貼を伴う方形平坦面と帯曲輪状の遺構を確認した。しかし、列石を伴う土塁等の古代山城跡に伴うと考えられる遺構は確認できなかった。このことから、No60鉄塔予定地については、発掘調査・記録保存を行った上で鉄塔建設はやむを得ないものとして筑紫野市文化財保護審議会の上の了承を受け、平成16年度調査を実施した。

第2節 調査組織

調査の体制と関係者は以下のとおりである。

調査主体 筑紫野市教育委員会

調査指導委員会

考古学	小田富士雄	福岡大学名誉教授（平成15年3月～）
考古学	西谷 正	九州大学大学院人文科学研究院名誉教授（平成16年4月～）
考古学	石松 好雄	下関市立考古博物館館長（平成15年3月～）
土木工学	林 重徳	佐賀大学低平地研究センター長（平成16年4月～）
日本史	坂上 康俊	九州大学大学院人文科学部教授（平成15年3月～）

調査の体制

平成11年度

総括	教育長	永渕正敏
庶務	教育部長	永田晋一
	社会教育課長	岡部隆充
	課長補佐兼係長	古賀幸信
調査	技師	草場啓一
調査作業員	柿原智子 北原三池 木原フミエ 行徳正二 高橋哲子 中田裕樹 福島純子 山田年美（五十音順）	

平成12年度

総括	教育長	永渕正敏（平成12年4月1日～平成12年12月31日） 高嶋正武（平成13年1月1日～平成13年3月31日）
庶務	教育部長	岡部隆充
	社会教育課長	田中哲也
	課長補佐兼係長	古賀幸信
	主査	野美山勝
調査	技師	草場啓一

平成13年度

総括	教育長	高嶋正武
庶務	教育部長	岡部隆充
	文化課長	田中哲也
	課長補佐兼係長	古賀幸信
	主査	野美山勝
調査	技師	草場啓一

平成14年度

総括	教育長	高嶋正武
庶務	教育部長	岡部隆充
	文化課長	山内幸雄
	課長補佐兼係長	古賀幸信
	主査	野美山勝
調査	技師	渡邊和子
調査作業員	井上清高 森 茂 森 嘉輝（五十音順）	

平成15年度

総括	教育長	高嶋正武
庶務	教育部長	伊藤清隆（平成15年4月1日～平成15年5月31日）

		香野國治（平成15年 6 月 1 日～平成16年 3 月31日）
	文 化 財 課 長	山内幸雄
	課長補佐兼係長	木村政弘
調 査	主 査	野美山勝
調査作業員	主 査	渡邊和子
	井上清高 早田エイ子 樋口真衣 文野綾香 森 茂 森 嘉輝	
	八尋ツネミ（五十音順）	

平成16年度

総 括	教 育 長	高嶋正武
庶 務	教 育 部 長	香野國治
	文 化 財 課 長	米元和夫
	課長補佐兼係長	満生裕亮
調 査	主 任 主 査	野美山勝
調査作業員	技 師	草場啓一
	井上清高 土屋愛子 砥上利昭 園田律子 園田義明 松島憲保	
	宮田惣悟 森 茂 安武百合香 八尋章太（五十音順）	

平成17年度

総 括	教 育 長	高嶋正武
庶 務	教 育 部 長	香野國治
	文 化 財 課 長	米元和夫
	課長補佐兼係長	満生裕亮
調 査	主 任 主 査	野美山勝
調査作業員	技 師	草場啓一
	井上清高 金子香澄 砥上利昭 園田律子 園田義明 松島憲保	
	宮田惣悟 森 茂 西 弘子 安武百合香 八尋章太（五十音順）	

平成18年度

総 括	教 育 長	高嶋正武
庶 務	教 育 部 長	松尾和幸
	文化振興課長	高石敏幸
	課長補佐兼係長	満生裕亮
調 査	主 事	羽生 健
調査作業員	主 任 主 査	山村淳彦
	主 査	草場啓一
	井上清高 金子香澄 砥上利昭 園田律子 園田義明 松島憲保	
	宮田惣悟 安武百合香（五十音順）	

平成19年度

総 括	教 育 長	高嶋正武
庶 務	教 育 部 長	松尾和幸
	文化振興課長	高石敏幸
	課長補佐兼係長	平嶋廣幸
調 査	主 事	猿渡康弘
整理作業員	主 任 主 査	山村淳彦
	主 査	草場啓一
	金子香澄 松島憲保 安武百合香（五十音順）	

第3節 調査の経過

平成11年度

城域の広がりを確認するため、土塁線の延長部分の踏査を行った。

平成12年度

阿志岐城跡確認調査及び今後の事業計画策定等に使用するため、1/500の精度の詳細地形測量図を作成するため、空中レーザー計測システムを用い城域及びその周辺部0.3km²の地形測量図作成を行った。本年度はその初年度にあたり、準備作業として現地測量範囲に14箇所の3級基準点及び水準点を設置した。また、九電が予定している鉄塔予定地の試掘調査を実施し、第38トレンチから第40トレンチを設定した。

平成13年度

阿志岐城跡周辺地計測両図作成業務の2年目として、設置対空標識設置及びヘリコプターによるデータ計測を行い、あわせてデータの解析と図化作業を実施した。また、これと並行して土塁の確認のため現地踏査をおこなった。

平成14年度

阿志岐城跡周辺地計測両図作成業務の3年目として、測量データ補足のためのトータルステーションによる測量を実施し、地形測量図を完成させた。また、第1水門、第2水門、第3水門、第1地点土塁、第2地点土塁、第12地点土塁、第14地点土塁の現況実測図（1/20）の作成及び写真撮影をおこなった。また、宮地岳古代山城跡確認調査指導委員会を発足させ、小田富士雄委員を会長に選任し次年度以降の本格的な確認調査の指導を受けた。

平成15年度

推定城域の東側丘陵が細長く伸びる尾根の主稜線にそって第14トレンチを設置し調査を実施し、第15トレンチから第21トレンチを第14トレンチに直交させ補足的に調査した。

平成16年度

西側尾根の土塁線が、踏査によって確認出来る第21地点より山頂側について追跡するため、第22トレンチから第27トレンチを調査した。また、踏査によって列石の可能性がある露頭箇所に第35、37トレンチを設定し調査した。平成12年度の試掘調査により、中世遺構が予想された九電鉄塔No61の発掘調査を実施した。

平成17年度

東側尾根の土塁線で踏査により確認出来る第1地点より山頂側及び第3水門と土塁線の関係について確認するため、第8トレンチから第12トレンチを調査した。また、第3水門から東側尾根についての確認のため第1トレンチから第7トレンチを調査した。

あわせて、第3水門前面の清掃及び表土除去をおこない、水門石塁の基部を確認し平成14年度に作成した実測図の補完を行った。

平成18年度

九電鉄塔No61予定地から土塁線が確認されている第22地点までの間で、地形形状や石材露頭などから土塁の可能性が高いと見られていた箇所にトレンチ(第28から第34)を設定し調査をおこなった。また、踏査により存在が確認されていた石切場について下草刈り、表土除去などをおこない状況確認を実施した。

平成19年度

平成12年度から平成18年度まで実施した宮地岳古代山城跡確認調査の成果を「阿志岐城跡」として発刊した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

阿志岐城跡が所在する筑紫野市は、九州の玄関口といわれている福岡市の南部に位置し、大宰府政庁がおかれた太宰府市に隣接している人口約98,000人の都市である。博多湾側の福岡平野と有明海側の筑後平野を結ぶ二日市地峡帯と呼ばれる幅約2km、延長約7kmの細長い回廊状の平野部に占地している。二日市地峡帯は、市中心部の針摺地区付近を分水嶺として、御笠川水系高雄川が福岡平野側に流れ、筑後川水系宝満川が筑後平野側に流れている。

市域の西部は、標高400～600m前後の背振山地、市域東部には、標高500～900m前後の三郡山地がそびえ、宮地岳はこの三郡山地の大根地山（標高652m）から派生する標高338.9mのほぼ円錐形を呈した丘陵性山地で、二日市地峡帯の筑後平野側開口部に突き出た形で位置している。

筑紫野市域の地質は、大半が早良花崗岩を基盤としており、その上に阿蘇4期火砕流堆積物などの第四紀層がのっている。宮地岳は、全山が早良花崗岩からなり、北側を宝満川、南側を宝満川支流の山家川によって浸食を受け形成された丘陵である。

阿志岐城跡は、宮地岳の北西に面する標高約140m～250mの山腹に立地する。城域の正面に大野城跡を望み、北西に目を転ずると大宰府政庁跡と水城跡が一望できる。また、南西方向には二日市地峡帯を挟んで基肄城跡を望見することができる。山頂付近からの眺望は良好で、北には宝満山・立花山・北西方向には博多湾・玄海島・志摩半島そして怡土城が置かれた高祖山（標高約416m）が遠望できる。南西方向には、高良山神籠石が所在する高良山（標高約312m）、久留米市街地とその前面に広がる有明海、さらに遠く島原半島などを眺めることができる。

第2節 歴史的環境

筑紫野市は、地勢的な環境から福岡平野と筑後平野を結ぶ回廊をなしており、古代から重要な軍事拠点となっていた。

そのことは、大宰府政庁・大野城・基肄城・水城がおかれたことや、時代が下って太平洋戦争末期には、米軍の九州侵攻に対する防衛拠点として福岡市にあった第16方面軍司令部を宮地岳南麓の地下要塞に移転させたことから首肯できる。

さて、この宮地岳に生活の痕跡を求められる最も古い遺跡は、後期旧石器時代に遡る。この時期の遺跡は、おもに宮地岳南麓の台地上から発見されており、天山遺跡、筑紫野病院遺跡、山家遺跡等からナイフ型石器などが採取されている。

縄文時代に入ると、同じく南麓の天山に所在する峰古野遺跡から押型文土器が発見されている。その後、後期にはいと宮地岳北側の沖積地に遺跡が立地するようになり、御笠地区遺跡A・B地点では広田式の精製土器の浅鉢や粗製深鉢などが出土している。また、宮地岳西麓の阿志岐シメノグチ遺跡では、晩期黒川式並行期の方形竪穴式住居跡が検出されている。

弥生時代には中期後半以降、宮地岳南麓の鞭掛遺跡、終末期の小型仿製鏡が出土した日焼遺跡、北麓では中期後半の丹塗大型特殊器台などの祭祀土器群が出土した阿志岐シメノグチ遺跡などが立地している。この時代の集落は、御笠地区遺跡に代表されるように山麓から沖積地に進出しており、中期以降古墳時代前期まで断続的に集落が形成されている。

古墳時代にはいと、宮地岳山麓は古墳築造拠点として急速に拡大する。阿志岐城直下に位置

する杉の谷古墳群（円墳3基）、阿志岐古墳群D群（6基）・B群（円墳21基・方墳5基）・C群（円墳7基）A群（円墳10基）、脇道古墳群（円墳4基）、老松神社古墳群（円墳2基）、天山古墳群（円墳7基）池田古墳群（円墳7基）などが、阿志岐から山家にかけての山麓に築造されていく。

古代に入ると、阿志岐城の西北西約5kmの四王寺山の南裾に、遠の朝廷とも呼ばれた大宰府政庁が設けられる。大宰府は、西海道九国三島の支配と内外使節の送迎や海辺防備を担当した地方官衙で、那津官家を前身とする。『日本書紀』推古天皇十七年（609）四月四日条において初出する筑紫大宰は、那津官家に派遣された官人と考えられている。そして、白村江の敗戦後、筑紫大宰は那津官家から大宰府政庁に移ったと考えられている。

大宰府の成立時期は特定出来ないが、政庁はこれまでの発掘調査により3期の造営が確認されており、第Ⅰ期は掘立柱建物で、おおむね7世紀後半代と考えられている。第Ⅱ期及び第Ⅲ期は、南北211m、東西112mの範囲を築地・回廊で囲い、建物を東西に配した朝堂院形式をとっている。

政庁の前面は平城京と同じく条坊制がしかれ、中央を南北に大路が通りその東側が左郭、西側が右郭とし、それぞれ十二坊ずつ計24坊、南北が22条の条坊が形成されていた。

天智天皇二年（663）、日本・百済連合軍は白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗を喫し、引き続き日本へ侵攻してくることが予想された。このため敗戦の翌年（664）対馬、壱岐、筑紫に防人と燧を設置し、筑紫に水城を築造した。また、その翌年（665）には百済からの亡命貴族達率憶礼福留と達率四比福夫の指揮のもとに筑紫に大野城と基肄城を築城し、答怱春初の指揮で長門国に長門城を築造した。

水城は、阿志岐城跡から西北西に約7kmのところにあり、二日市地峡帯福岡平野側開口部を閉塞する形で全長約1,200m、基底部幅約80m、高さ13mの土塁を築き、土塁の前面には幅約60m、深さ約4mの堀を設けたものである。また、記紀に記載はないものの、水城の西側を補完する形で、小水城と呼ばれる土塁群が確認されている。

大野城は、阿志岐城跡の北西、約5.5kmの四王寺山山頂（標高約410m）に築かれている。土塁総延長は約6.5kmで城門は福岡平野側に1箇所、大宰府政庁側に4箇所が確認されており、城内の平坦部には総柱の礎石建物群が70棟余確認されている。

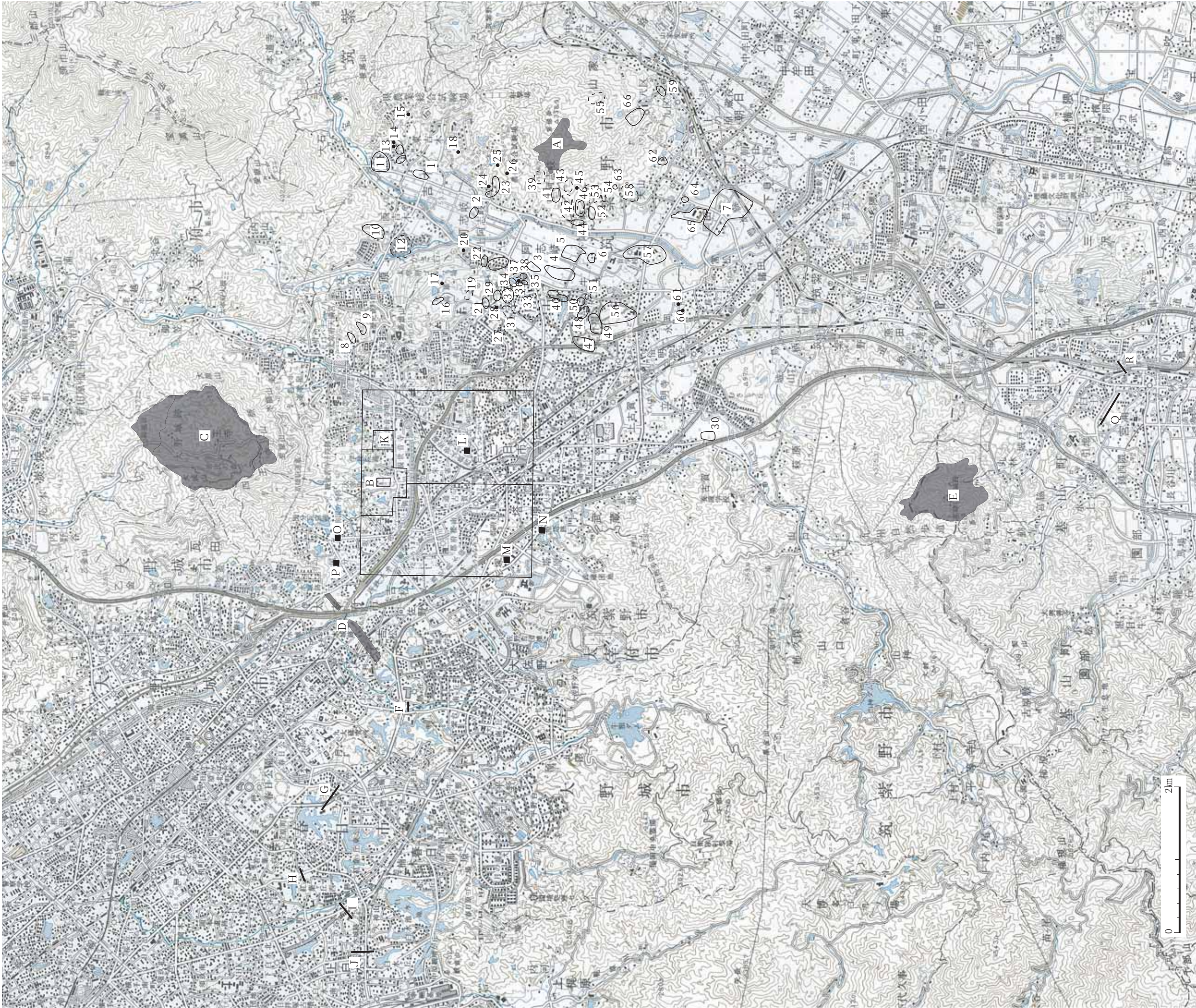
基肄城は、佐賀県基山町と本市にまたがって位置し、阿志岐城跡の南南西約7.5kmの基山（標高約400m）の山頂に築かれている。土塁の総延長は約3.9kmで、4箇所の城門と40棟余の建物群が確認されている。また基肄城の南側山裾には、時期等の詳細は不明であるがとうれぎ土塁と関屋土塁と呼ばれる小水城に類似した土塁が確認されている。

白村江敗戦後わずか2年のうちに、急遽築造されたこれらの防衛拠点は、大宰府政庁を守備することを目的としており、それぞれの配置には戦略的な意図をもって計画されたものと考えられる。

阿志岐城の正面直下には、昭和52～53年度の発掘調査で9棟の掘立柱建物などが検出された蘆城駅家推定地がある。田河道に隣接した位置にあり、同駅家において神亀・天平年間に詠まれた歌9首が『万葉集』に収められている。

参考文献

- 中島聡 向井一雄「阿志岐城跡の発見について」『溝瀆』速報1号 1999 古代山城研究会
- 秀嶋龍男「宮地岳古代山城跡—2003年3月～11月踏査報告」『溝瀆』第11号 2003 古代山城研究会
- 筑紫野市史編さん委員会編『筑紫野市史 上巻 自然環境 原始・古代 中世』1999
- 筑紫野市史編さん委員会編『筑紫野市史 資料編（上）考古資料』2001
- 倉住靖彦『古代の大宰府』吉川弘文館1985



第1図 阿志岐城跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

- A.阿志岐城跡 B.大宰府政庁 C.大野城 D.水城 E.基肆城 F.上大利小水城 G.春日小水城 H.小倉小水城 I.大土居小水城 J.天神山小水城 K.観世音寺
L.般若寺 M.杉塚廃寺 N.塔原廃寺 O.国分寺 P.国分尼寺 Q.とうれぎ土塁 R.関屋土塁
- 1.御笠地区遺跡A地点 2.御笠地区遺跡B地点 3.御笠地区遺跡C地点 4.御笠地区遺跡E地点 5.御笠地区遺跡F地点 6.御笠地区遺跡G地点 7.岡田地区遺跡 8.浦ノ田B遺跡
9.浦ノ田A遺跡 10.小賀谷遺跡 11.たか取遺跡 12.塚口古墳群 13.田代2号墳 14.田代1号墳 15.帽子形古墳 16.石穴遺跡 17.松ヶ浦古墳 18.六度古墳
19.集り古墳群 20.六本松古墳 21.集り遺跡 22.六本松遺跡 23.尺ヶ浦遺跡 24.尺ヶ浦古墳 25.大谷古墳 26.星隈古墳 27.苅浦浦古墳 28.今王第2古墳
29.今王A遺跡 30.貝元遺跡 31.今王第1古墳 32.吉ヶ浦A遺跡 33.吉ヶ浦古墳群 34.吉ヶ浦B遺跡 35.吉ヶ浦C遺跡 36.吉ヶ浦第4号墳 37.柚ノ木古墳群
38.柚ノ木遺跡 39.杉の谷古墳群 40.高雄遺跡 41.阿志岐古墳群D群 42.阿志岐古墳群B群 43.阿志岐古墳群C群 44.宮崎遺跡 45.シメノグチ遺跡
46.阿志岐古墳群A群 47.野黒坂遺跡 48.イカリノ上遺跡 49.イカリノ上古墳 50.上ノ浦遺跡 51.上ノ浦古墳群 52.脇道遺跡 53.脇道古墳群
54.老松神社古墳群 55.殿様塚古墳 56.峠山遺跡 57.牛島宮崎遺跡 58.天山古墳群 59.山家遺跡 60.銭塚古墳 61.鳥居元古墳 62.筑紫野病院遺跡
63.峰古野遺跡 64.鞭掛遺跡 65.日焼遺跡 66.第16軍司令部跡

第3章 調査の内容

第1節 調査の目的と概要

阿志岐城跡は、平成11年3月に発見されるまで、その存在はまったく知られていなかった。昭和55年に福岡県立園芸試験場（現在福岡県農業総合試験場）が移転して来た時も、敷地内に土塁線の一部が取り込まれていたにもかかわらず、試験場の縁辺緑地帯として破壊を免れていた。また、第1水門も杉の谷川砂防ダムの建設に際してわずかな距離を置いて破壊を免れており、きわめて幸運な遺跡だったといえる。

発見当初の現地踏査で、杉の谷川西の尾根線から農業総合試験場を周回する林道沿いに列石が部分的に露出していることが確認された。また、山頂西側ピークにも土壇状の地形が認められたことから、宮地岳山頂とその西側のピークを取り囲む城域が想定された。

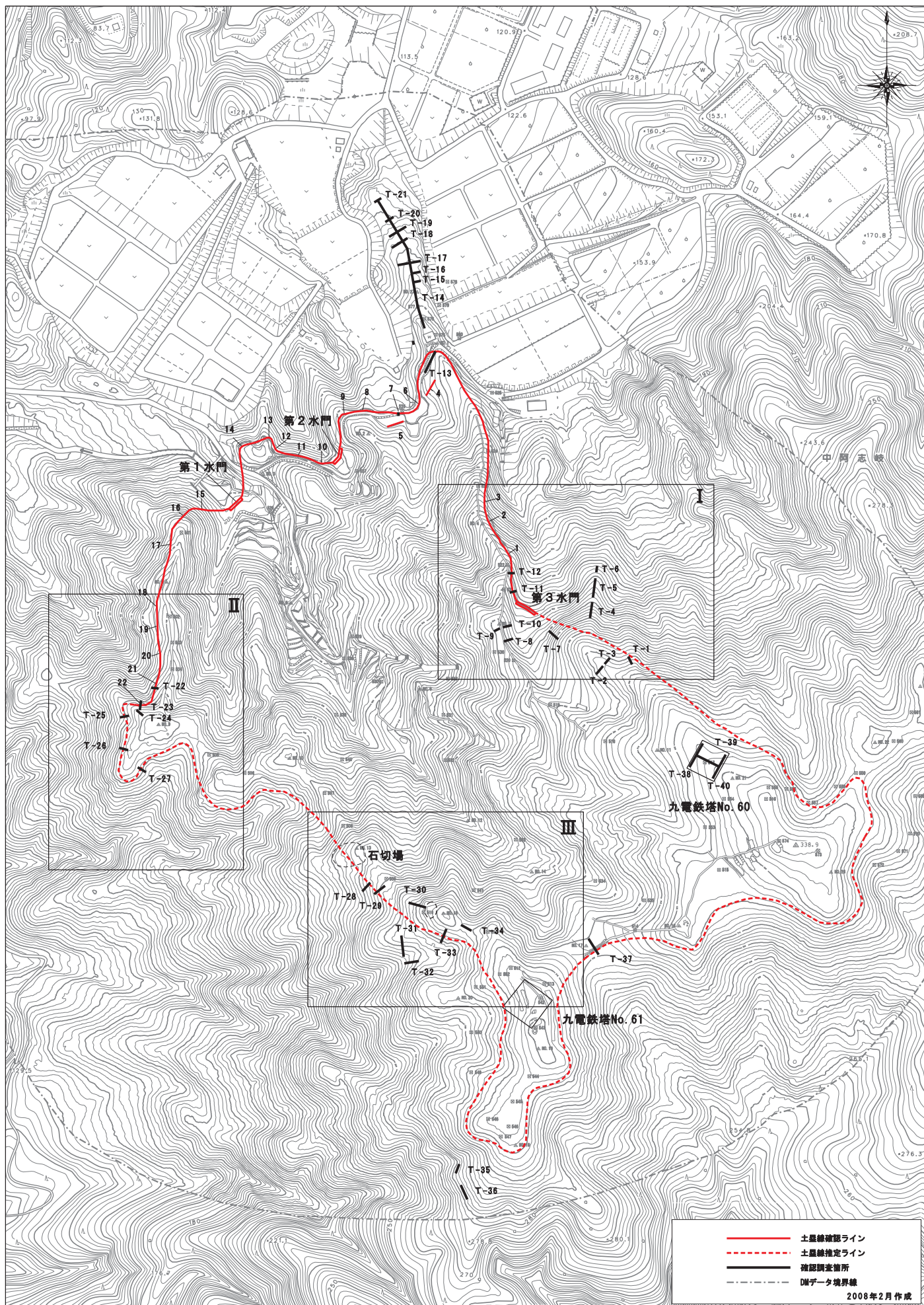
調査は、表面観察において切石加工の列石や、石塁については清掃後に写真撮影と実測を行い、便宜的に地点番号を設定した。列石が覆土して表面観察では確認できない場合も、ボーリングステッキによる追跡で判明した部分については連続した土塁線として認定した。これらの手法で判定できない地点について、人力によるトレンチを設定した。

現地踏査で発見された遺構は、基部に切石の列石を伴う版築土塁（以下、土塁）と石塁で、宮地岳の山頂部とその西側ピークから北西の宝満川に向かって伸びる尾根に22ヶ所が確認されており、総延長は約1.34kmに及ぶ。城域は、山頂とその西側ピークに挟まれた谷を流れる宝満川水系杉の谷川を中心に東西の尾根を巡らせている。確認された土塁線の最も低いところは第1水門で標高約137m、宝満川左岸の沖積面（標高約46m）からの比高差は約91mである。丘陵裾部から第1水門まで、杉の谷川沿いに直線距離で約600mを測る。現在確認されている土塁の最高所は第1地点で標高約250m、沖積面からの比高差約204m、第1水門からの比高差約133mを測る。

土塁線は、ヤツデ状に伸びる尾根の先端部を、標高140mから150mのラインをほぼ水平に約300mほど蛇行し、杉の谷とその東側の小さな2つの谷を横断して城域の正面を形成している。この正面の土塁線を上面からみればかなりの蛇行をしているが、正面から見ればほぼ水平に直線的に築造されている。土塁線は、正面の土塁線両端部から大きく屈曲し、尾根の稜線に沿って中腹まで遡上し、西側と東側の城域を形成している。西側は、杉の谷川からその西に位置する尾根に遡上して尾根の稜線で屈曲するところから西側の城域とした。東側は、第4地点の位置する尾根を遡上する土塁線を東側の城域とした。この土塁線によって形成された城域の平面プランは、コの字形を呈している。

発見された土塁は、22ヶ所で東側の尾根から第1～第22地点とした。水門跡は、杉の谷川を第1水門その東側の谷に位置する第2水門と東側の尾根の外に位置する第3水門の3ヶ所が確認された。

本稿で水門としている石塁は、切石又は自然石を数段積み上げたもので、水口等の構造物は確認されていないが、谷部を閉塞する石塁として何らかの排水機能が備わっていたものと考えられることから水門とした。



第2図 阿志岐城跡調査箇所図 (1/5,000)

第2節 東側城域の調査

東側の城域は、宮地岳山頂から杉の谷川を挟んで北西に延びる尾根に築造されている。城域正面の第6地点から東側城域の第3地点までの間は列石が確認出来ていないが、城域正面の土塁線を林道が概ねトレースしており、林道が尾根先端部を断ち切って横断している附近を城域の角と想定している。また、第4地点の列石が土塁と関係しているとすれば、第4地点列石の延長線上で尾根主稜線に遡上する可能性がある。

東側城域が確認出来る北端は、標高約180m附近の稜線から東側斜面にやや降った位置に、幅約2m程度の土塁天端状の平坦面が稜線に添って約80m確認される。この間、ボーリングステッキによる調査でも列石は確認できなかった。

列石が表面上観察できるのは第3地点からで、第2、第1地点まで断続的に観察され、この間は概ねボーリングステッキによる追跡ができた。また、第1地点から城外（東側）に降った谷に第3水門が位置している。

尾根の東側斜面は急峻で、尾根そのものが巨大な壁状を呈している。

第1地点

東側尾根で土塁線が確認される最終端で、第2地点からの延長線上に約2mの列石が確認された。列石は、大半が覆土しており詳細は不明だが、2段積みで基底石が確認される。

第2地点（第4図）

第3地点から連続する土塁で、標高約227mから230m附近まで延長約17mが確認される。

土塁は、列石とその基底石・版築土塁からなり、主稜線を高さ1m程度残し、その東側斜面を利用して内托式土塁を築造している。土塁の天端は比較的フラットで土塁肩部の形状を良く残している。

基底石は、方形板状に整形した切石で、列石の面から2cm～18cm前後張り出して据えている。列石は、方形切石を基底石の上に1～2段に積み上げており、高さを概ね60cmから70cmになるよう調整されている。石積みにあたっては、数ヶ所に切り欠き加工が施されているほか、面取り調整が施されている。

列石上面から土塁天端前縁までは約1.7m、基底石上面から列石を含む土塁高は約2.4mを測る。土塁の前面傾斜角度は約60°で、土塁下部の丘陵斜度は約50°～60°を測る。土塁の遡上する角度は約10°～15°で、尾根の主稜線と並行する。

第3地点

標高約216mから標高約220mに位置し、約5mが確認される。第2地点から連続する土塁であるが、第2地点との間と北側が地滑りで崩壊している。列石の状況は、おおむね第2地点と同様であるが、方形切石の基底石とその上に切石加工の列石が2段に積まれている。

東側城域のトレンチ調査（第3図）

表面観察で確認できる最終地点の第1地点から、土塁線がどのルートをどこまでたどれるのか、また、平成13年に発見された第3水門と土塁線の間隔を確認することを目的に、第1から第12トレンチを設定した。

第12トレンチは、表面観察で確認出来る第1地点より、ボーリングステッキによる追跡が出来なくなる最終端部に設定した。

第11トレンチは、ボーリングステッキによる確認が取れなくなった第12トレンチと第3水門との連続性を確認するため、その延長線上に設定した。

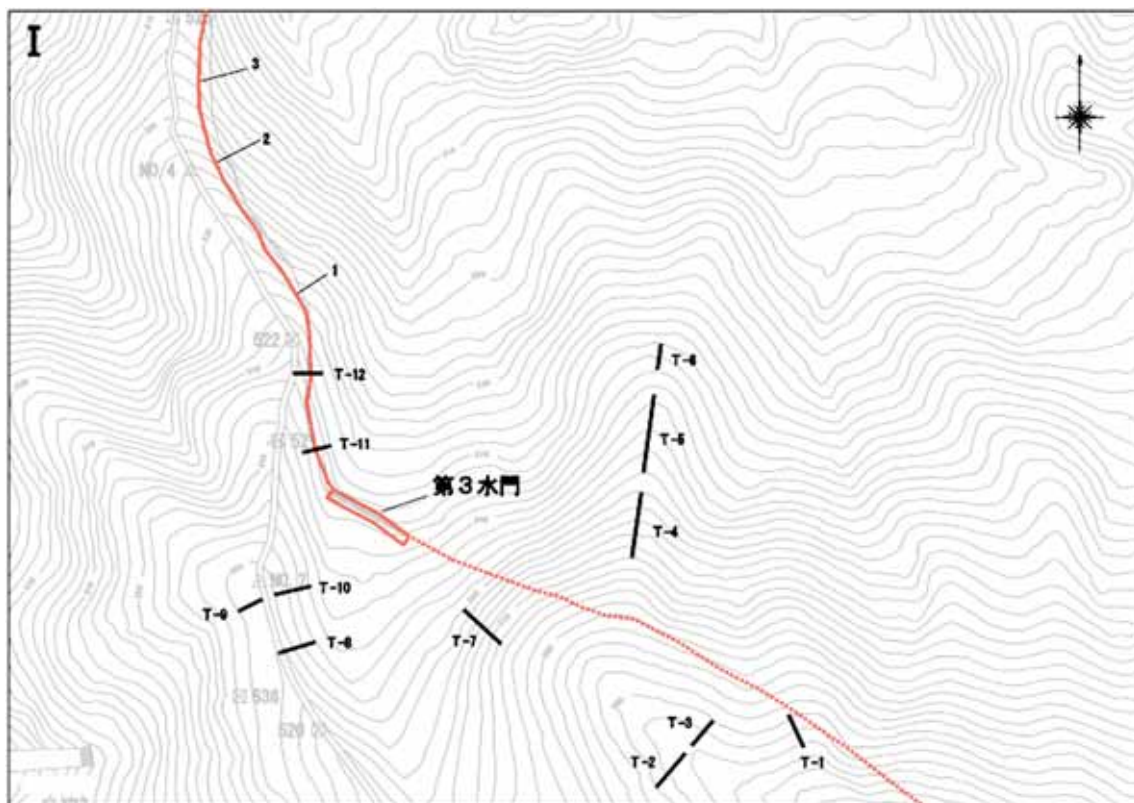
第8、第9、第10トレンチは、第1地点から宮地岳山頂に伸びる延長線で確認のため設定した。

第4、第5、第6、第7トレンチ及び第1、第2、第3トレンチは、第3水門からさらに東の尾根に土塁線が伸び城域が広がる可能性を検証するため設定した。

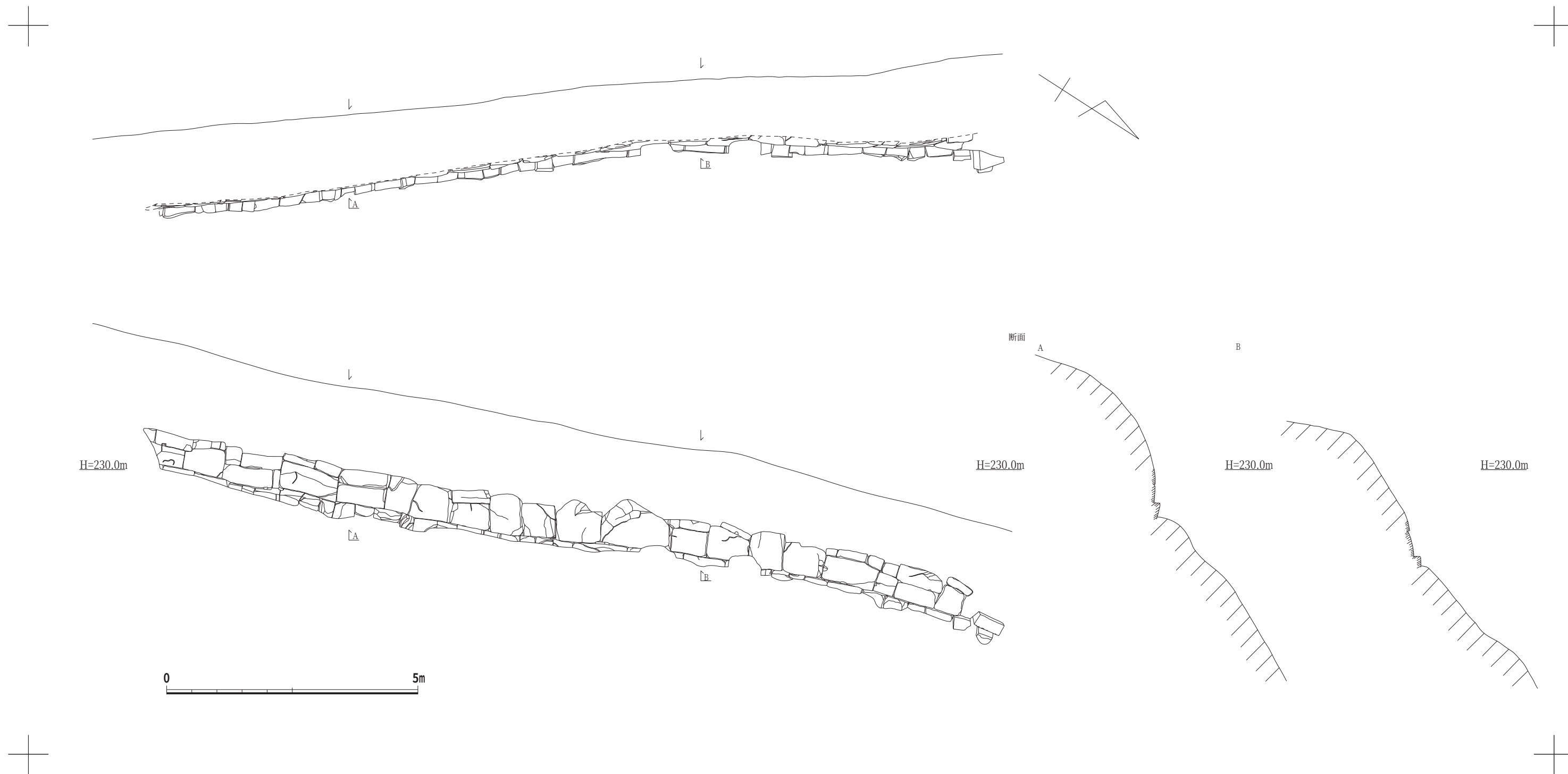
調査の結果、第12トレンチで、第1地点からの延長線上に良好な土塁を確認した。第11トレンチでは、第12トレンチ検出の土塁から第3水門に向かって尾根斜面を斜行する土塁を確認した。

第8、第9、第10トレンチでは、表土層直下で地山面が検出され、第11トレンチで確認された土塁線とは別の土塁線が伸びる可能性はきわめて低いことが判明した。

第4、第5、第6、第7トレンチ及び第1、第2、第3トレンチでも、表土層直下に地山面または、二次堆積土を挟んで地山面が検出され、土塁等の遺構は確認出来なかった。このことから第3水門から東側に土塁が伸びる可能性は低いと考えられる。



第3図 東側城域トレンチ配置図



第4図 第2地点土塁実測図 (1/80)

第11トレンチ調査の詳細（巻頭図版8～11、第3・5～9図）

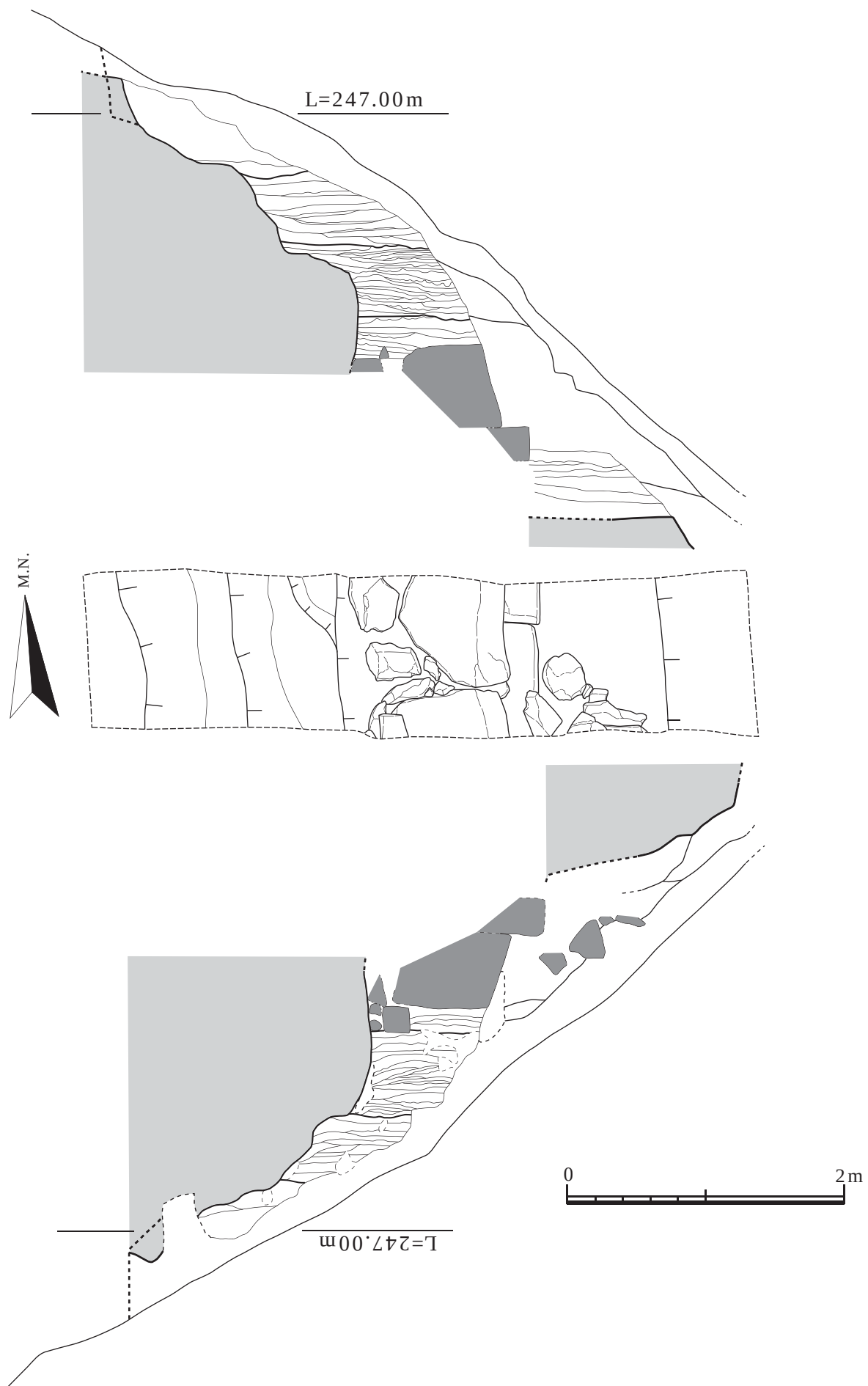
最も第3水門に近く、尾根線上を遡上していた土塁が水門に取り付くために下降し始めた所にあるトレンチで、水門列石西端から直線距離で約14m、標高245～247mに位置する（第3図）。谷最奥部にある水門西端は岩盤にすり付いているため、結果として土塁前面までの引きが漸移的に短くなっており、約9m北側にある第12トレンチでは土塁の奥行きが1.7～2.3mあるのに対して、地山岩盤の傾斜角が直立していく本トレンチでは0.7～1.0mと約半分になっている。この変化により、本トレンチと後述する第12トレンチとでは、近距離にある版築土塁でありながら積み土の方法を異にしている。

周辺の地山は花崗岩風化土で、地山を削り出して30～50cmのテラスを作りながら地山整形を行っており、急峻にせり立ったという感がある。基底石及び列石とその裏込めが未掘につき詳細不明ではあるが、仮にここを1段分とすると3段に段切りしていることになる。版築土塁の残存寸法は、前面土盛り下面からの数値で高さ約3m・奥行き約4m、元々の土塁頂部までの推定高は基底石下面から約5mである。版築の段階^(註1)と地山のテラスとの関係については、概ね対応関係にあるものと考えられる。3段階上面と中段テラス、4段階上面と上段テラスのレベルがほぼ一致していることが窺える。また、段切りは概ね60cmを一つの基準としているようで、本トレンチ北壁の場合、前面土盛り～基底石上面、基底石上面～列石上面列石上面～中段テラス、中段テラス～上段テラス、上段テラス～地山最上端の高さがそれぞれ約60cmを測る。奥行きについては若干のばらつきがあるようだが、50～60cm程度で地形や版築の変化点に当たっている。地山整形後、その最下端に幅 $80+a$ cm×厚さ25cm（奥行きは不明）の扁平な加工石を基底石として据え、その直上に基底石前面から約20cmの引きをとって基底石の石同士の継ぎ目を交互にずらしながら列石を載せて、そこから版築土塁が積み始められる。また、本トレンチにおいては、基底石前面に版築状の土盛りが認められ、浅黄色真砂と真砂ベース混合土を7層6枚に互層に積んでいる。奥行き100cm、高さ50cmの規模で、土塁の版築1段階との作業上の前後関係は不明である。土盛りが基底石前面の1/3程度を覆っているため、基底石据え付け後の所産であることは間違いないが、その性格については、版築作業を行うための作業上の仮足場、または列石前面の犬走り状の平坦面とも考えられる。ただし、他所では確認されていないため現段階での言及は控えておく。

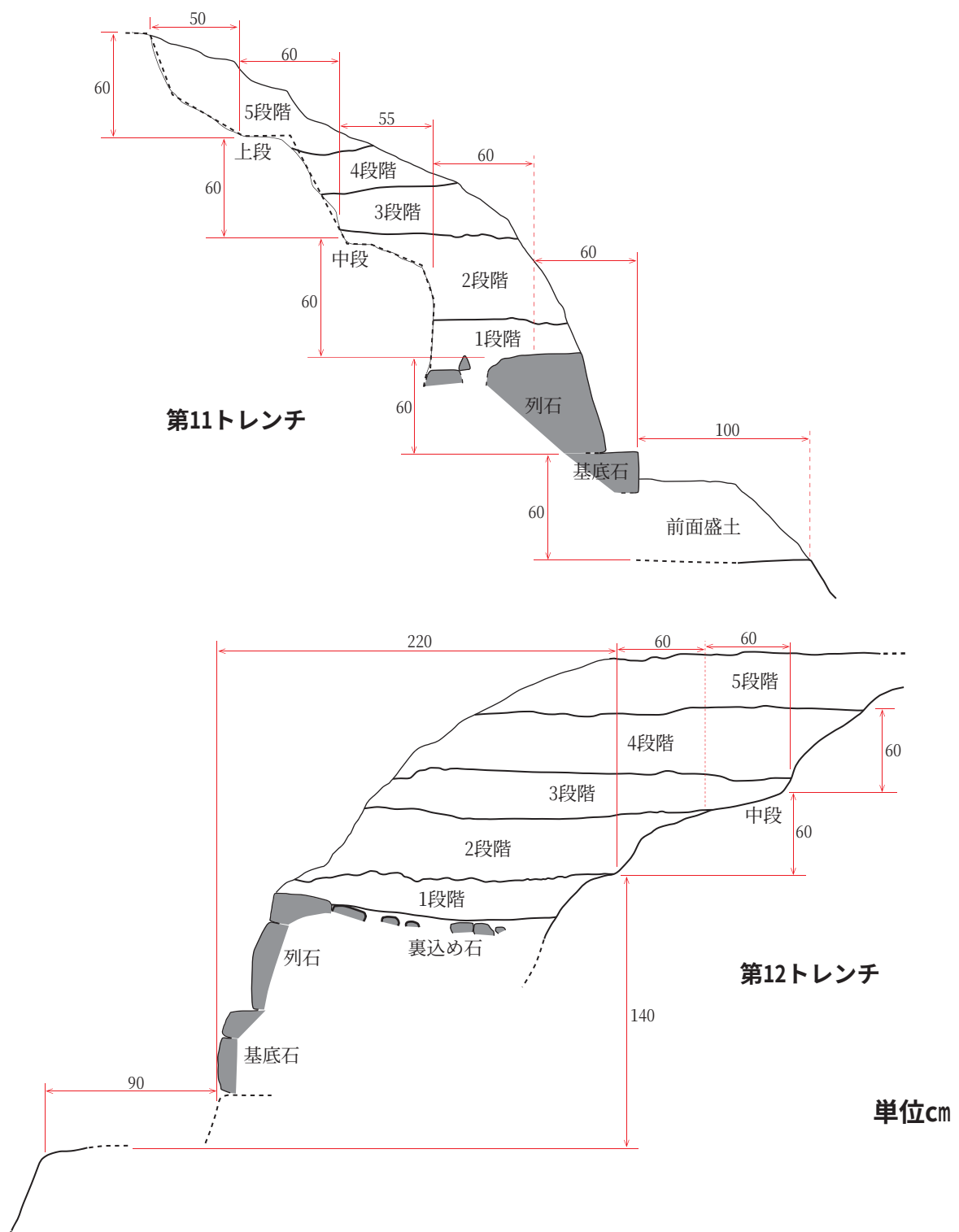
版築土塁は、5段階29枚36～48層に分層された。1段階は南壁37～40層（4層4枚）、北壁47～51層（5層4枚）までで、全体が赤褐色を呈する。赤粘土と真砂ベース混合土を互層に積んでおり、赤粘土が多用され塊状を呈する。真砂は少量であり、工区全体に水平分布する。なお、1段階の山側に20cm×20cm方柱状の石が横位に設置されており、土を積み上げるに当たって、裏込めに対する何らかの意図がある可能性が考えられる。ただし、他所では確認されていないため、機能については今後の検討課題としたい。

2段階は南壁32～36層（5層5枚）、北壁40～46層（7層4枚）までで、全体が黄褐色を呈する。黄褐色粘土と浅黄色真砂、淡黄色真砂を互層に積んでおり、真砂が主体となっている。粘土と真砂は同等均一で、工区全体に水平分布する。

3段階は南壁16～31層（16層9枚）、北壁20～39層（20層10枚）までで、全体が赤褐色を呈する。谷側外端部に黄褐色粘土を多用しているために層数が多い。赤粘土・赤粘土ベースの混合土・黄粘土ベースの混合土と浅黄色真砂・淡黄色真砂・真砂ベース混合土を同等均一に積み土する。第11トレンチ全体の土層のうちで最も緻密な互層をなしている。また、他段階の版築に対して3段階のみが積み土法が異なっている。



第5図 第11トレンチ実測図 (1/40)



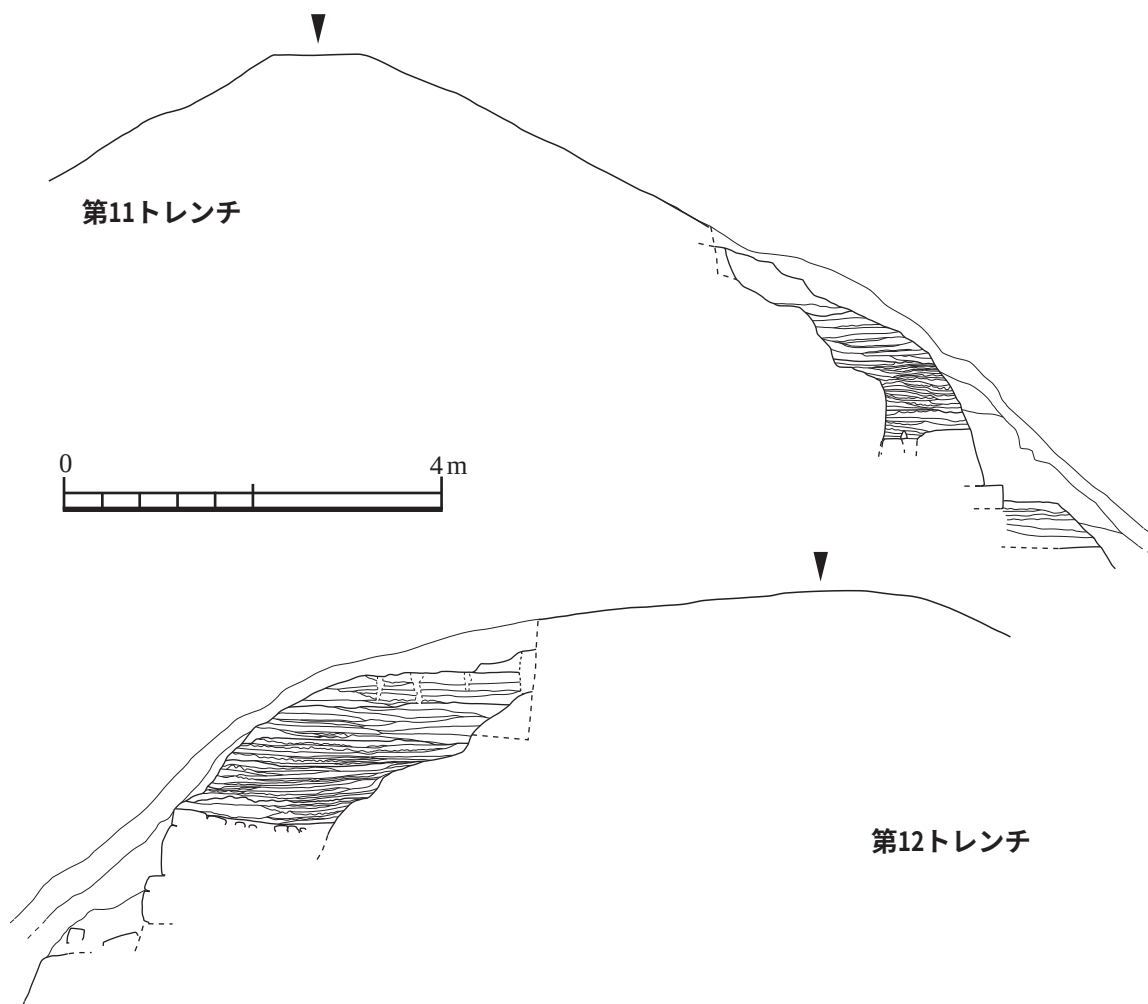
第6図 第11及び第12トレンチの版築土塁と地山切土との関係模式図

4段階は南壁8～15層（8層5枚）、北壁8～17層（10層5枚）までで、全体が赤褐色を呈する。赤粘土・赤粘土ベースの混合土と浅黄色真砂・淡黄色真砂を用い、赤粘土を多用する傾向がある。工区全体に水平分布している。

5段階は南壁5～7層（3層3枚）、北壁4～7層（4層3枚）までで、全体が黄褐色を呈する。黄褐色粘土と真砂ベースの混合土を用い、粘土を多用する。工区全体に水平分布している。

（小鹿野亮）

註1 土塁中の版築の大単位については、分層したものが工程差を示すとは限らないので、ここでは何々段階と呼称することに留めた。また、何々層何々枚としたものは、何々層は段階中で分層できた層の数、何々枚はその施工単位の最小単位を表示した。



第7図 第11及び第12トレンチ付近の土塁断面形状

- 1 表土
- 2 明黄褐色混合土 真砂が少し混じる。
- 3 明黄褐色土
- 4 明黄褐色混合土 2層より真砂が多い。塊状。

5段階

- 5 浅黄色混合土 粘土＋真砂、白色砂粒が目立つ。非常に硬質。
- 6 浅黄色粘質土 粘土＞真砂、非常に硬質。
- 7 浅黄色粘質土 粘土＞真砂、非常に硬質。5層よりやや砂粒が多い。

4段階

- 8 明黄褐色粘質土 単純層
- 9 明黄褐色混合土 粘土＋真砂が均一。
- 10 浅黄色真砂
- 11 明黄褐色粘質土
- 12 浅黄色混合土 真砂へースに微量の明黄褐色土塊。
- 13 明黄褐色混合土 砂多く、非常に硬く締まる。
- 14 明黄褐色粘質土 単純層
- 15 明黄褐色混合土 粘土＋真砂、塊状

3段階

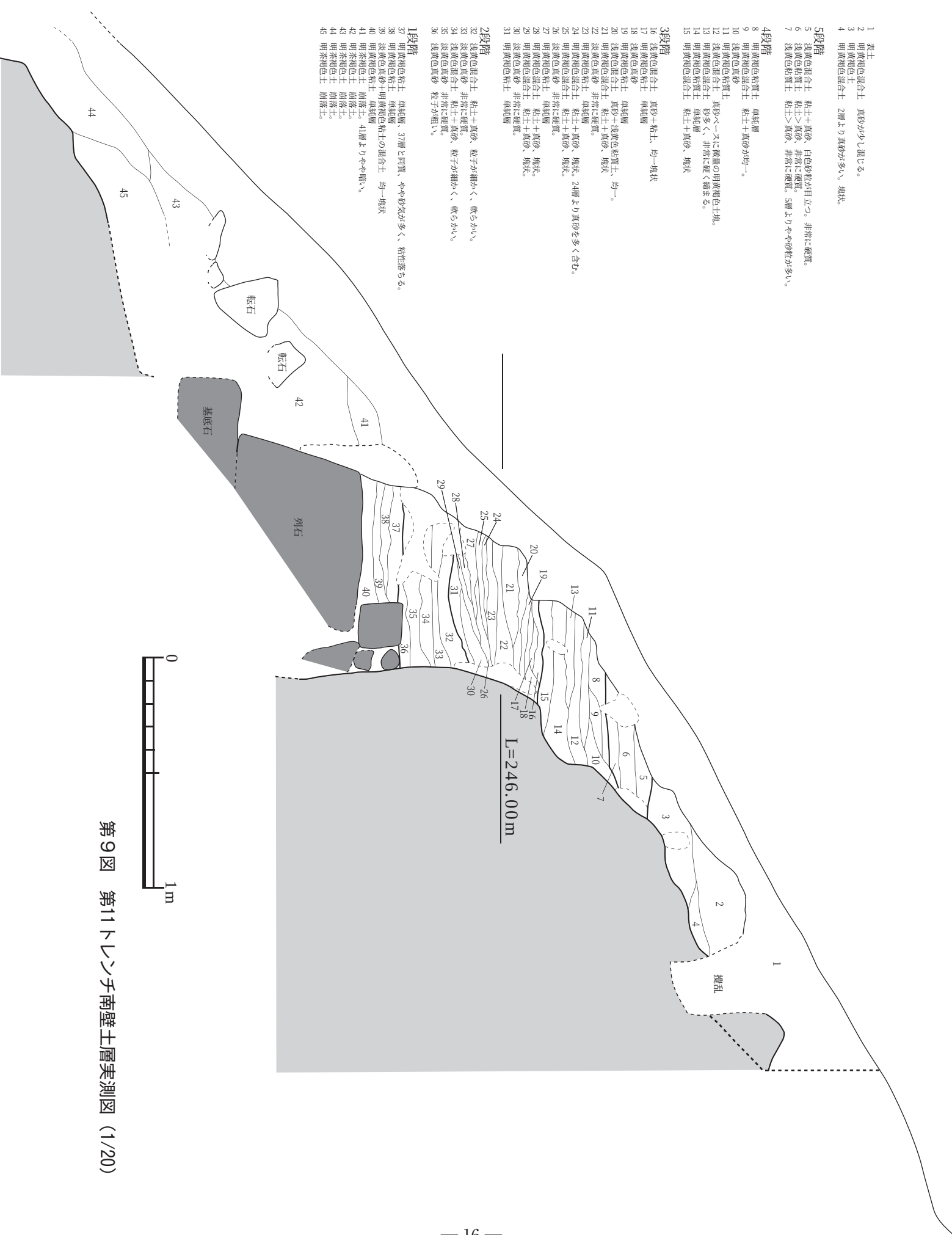
- 16 浅黄色混合土 真砂＋粘土、均一塊状
- 17 明黄褐色粘土 単純層
- 18 明黄褐色真砂
- 19 明黄褐色粘土 単純層
- 20 浅黄色粘質土 真砂＋浅黄色粘質土、均一。
- 21 明黄褐色混合土 粘土＋真砂、塊状
- 22 浅黄色真砂 非常に硬質。
- 23 明黄褐色粘土 単純層
- 24 明黄褐色混合土 粘土＋真砂、塊状。24層より真砂を多く含む。
- 25 明黄褐色混合土 粘土＋真砂、塊状。
- 26 浅黄色真砂 非常に硬質。
- 27 明黄褐色粘土 単純層
- 28 明黄褐色混合土 粘土＋真砂、塊状。
- 29 明黄褐色混合土 粘土＋真砂、塊状。
- 30 浅黄色真砂 非常に硬質。
- 31 明黄褐色粘土 単純層

2段階

- 32 浅黄色混合土 粘土＋真砂、粒子が細かく、軟らかい。
- 33 浅黄色真砂 非常に硬質。
- 34 浅黄色混合土 粘土＋真砂、粒子が細かく、軟らかい。
- 35 浅黄色真砂 非常に硬質。
- 36 浅黄色真砂 粒子が粗い。

1段階

- 37 明黄褐色粘土 単純層、37層と同質、やや砂気が多く、粘性落ちる。
- 38 明黄褐色粘土 単純層
- 39 浅黄色真砂＋明黄褐色粘土の混合土 均一塊状
- 40 明黄褐色粘土 単純層
- 41 明黄褐色粘土 崩落土。41層よりやや暗い。
- 42 明黄褐色土 崩落土。
- 43 明黄褐色土 崩落土。
- 44 明黄褐色土 崩落土。
- 45 明黄褐色土 崩落土。



第9図 第11トレンチ南壁土層実測図 (1/20)

第12トレンチ調査の詳細（巻頭図版4・6～8、第3・6・7・10・11図）

前述の第11トレンチの北側約9mに位置するトレンチで、第3水門列石西端からは直線距離で約23mを測る（第3図）。標高242～245m付近にあって、第11トレンチの下位に当たり約1mのレベル差がある。土塁の残存寸法は、基底石下面からの数値で高さ約2.6m・奥行き約4mを測り、地山までの引きも十分にあって重厚な内托土塁といった感があり、先の第11トレンチのそれとは全く様子が異なっている。5段階37枚63層に分層された。

全体的には、土塁内部中心から外側の粘土系土壌は厚みを増し、谷側については真砂系土壌を多用する傾向が特徴として認められる。これは後述する1・2・3・5の各段階（層群のまとまり）に基本的に同一の現象で、各層をみても粘土と砂が互層、段階をみても互層になっている。段階ごとに赤粘土と黄粘土とを繰り返す粘土の用法の違いに工法上の意味があると考えなのか、これは第11トレンチにも共通して認められた現象であり、今後の検討を要する。

また、赤粘土と黄粘土が各段階で特徴的に用いられており、黄粘土は客体的なもので不足した赤粘土の補足材料として使ったのか、あるいは赤粘土と黄粘土を選択的に用いた工法上の使い分けを想定するのか、今後の課題である。

積み土の前段階において、地山の花崗岩風化土を削り込むのは第11トレンチと同様である。ただし、第11トレンチとは異なって明瞭な段としてではなく、斜めの弱い段となっているのが特徴である。基底石及び列石裏込めが未掘であるため下半の大部分の様子が未解明であるが、仮にこの部分を1段とすると概ね3段に段切りしており、1段階上面と中段テラス、3段階上面と上段テラス最奥部のレベルが一致している。版築の段階と地山のテラスが概ね対応関係にあることも第11トレンチと同様である。また、段切りを概ね60cmを一つの基準としているのも同様で、仮に基底石下面～中段テラス130cm、中段テラス～上段テラス最奥部60cm、上段テラス最奥部～土塁最上部まで60cmと概ね60cmで割り切れる数値となっている。奥行きについては若干のばらつきがあるようで60～65cm程度で地形や版築の変化点に当たる。

その最下端に幅40cm×厚さ30cm（奥行きは不明）の扁平な加工石を基底石として据え、その直上に基底石前面から約15cmの引きをとって基底石の石同士の継ぎ目に列石を交互にずらしながら列石を載せている。列石は2段あって、下段列石が幅40cm×厚さ40cm、上段列石が幅40cm×厚さ20cm（共に奥行きは不明）で、上段がやや扁平で小ぶりの石を配している。列石が遡上する傾斜角度は約22°を測る。

最下端に基底石を据え、その直上に若干の引きをとって列石を載せるのは他所でも同様であるが、本トレンチでは列石裏側と削り出した地山面との間に110cm程の距離があって、10～15cm程の花崗岩の栗石で裏込めとしている。未調査につき詳細は不明であるが、隙間には真砂が充填されている。列石と裏込め礫の上端レベルは一致しており、その直上から土塁が積み始めとなっている。

1段階は59層～67層までで、全体が赤褐色を呈し、10層3枚に分層された。赤粘土及び赤粘土ベース混合土を多用し、浅黄色真砂・淡黄色真砂・微量の褐色粘土との互層で構成される。1・2・4・5の各段階では積み方のパターンが似ており、谷側外端部に粘土を厚く積み、その内側に粘土と真砂を互層に積む特徴がある。

2段階は38層～58層までで、全体が黄褐色を呈し、19層5枚に分層された。赤粘土・赤粘土ベース混合土・黄褐色粘土と浅黄色真砂・淡黄色真砂・真砂ベース混合土を用い、淡黄色真砂が主体となっている。谷側外端部のみ赤粘土を多用する。

- 1 表土
- 2 明黄褐色真砂(2.516/6)

5段階

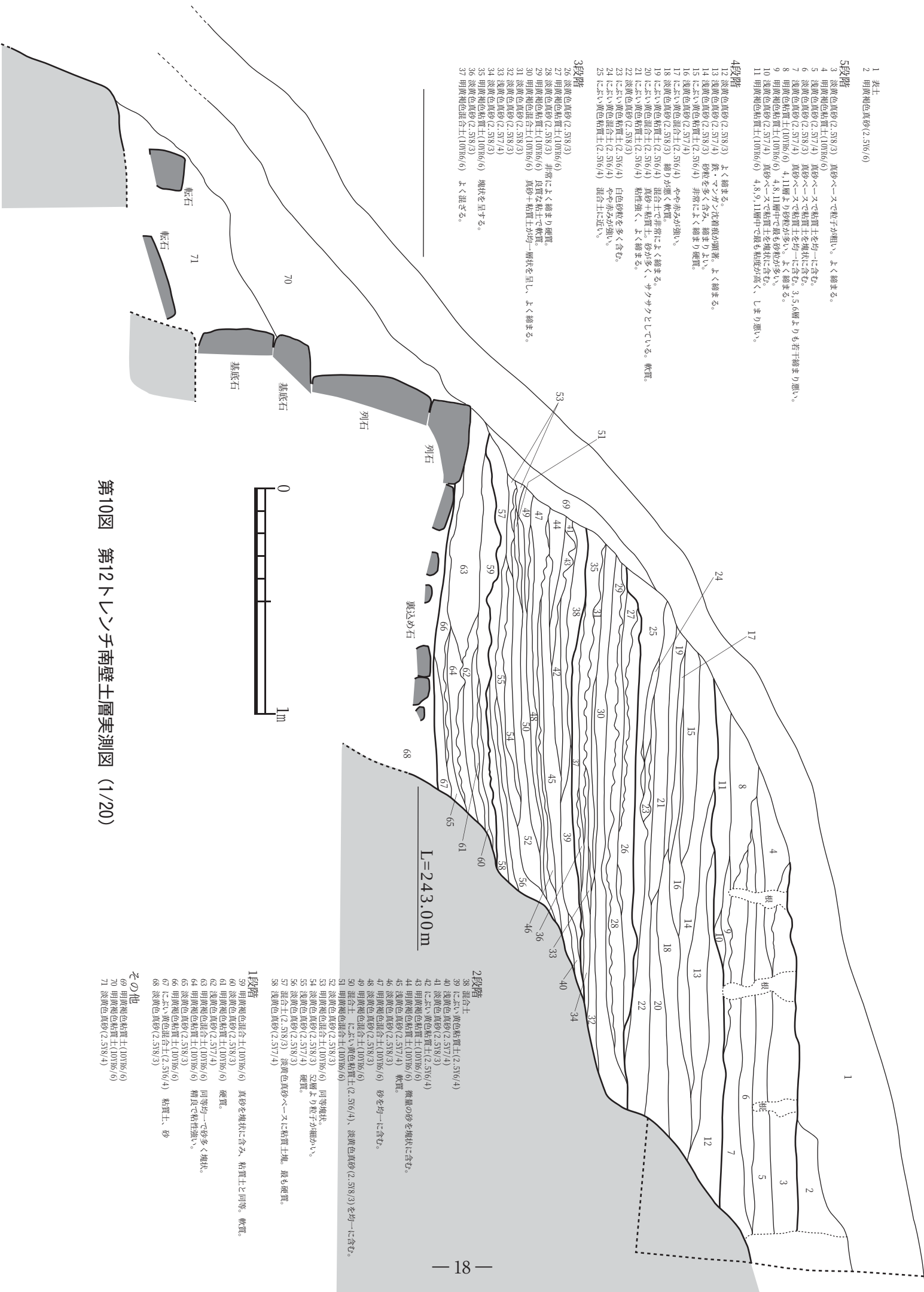
- 3 淡黄色真砂(2.518/3) 真砂ペースで粒子が粗い。よく締まる。
- 4 明黄褐色粘質土(10186/6) 真砂ペースで粘質土を均一に含む。
- 5 淡黄色真砂(2.517/4) 真砂ペースで粘質土を塊状に含む。
- 6 淡黄色真砂(2.518/3) 真砂ペースで粘質土を均一に含む。3.5.6層より若干締まり悪い。
- 7 明黄褐色粘質土(10174/6) 真砂ペースで粘質土が多い。上締まる。
- 8 明黄褐色粘質土(10186/6) 4.11層より砂粒が多い。上締まる。
- 9 明黄褐色粘質土(10186/6) 4.8.11層中で最も塊状を含む。
- 10 淡黄色真砂(2.517/4) 真砂ペースで最も粘質土を塊状に含む。
- 11 明黄褐色粘質土(10186/6) 4.8.9.11層中で最も粘粒が細く、しまり悪い。

4段階

- 12 淡黄色真砂(2.518/3) よく締まる。
- 13 淡黄色真砂(2.517/4) 鉄・マンガン沈着痕が顕著。よく締まる。
- 14 淡黄色真砂(2.518/3) 砂粒を多く含む。締まりよい。
- 15 にぶい黄色粘質土(2.516/4) 非常によく締まり硬質。
- 16 淡黄色真砂(2.517/4) やや赤みが強い。
- 17 にぶい黄色混合土(2.516/4) 締りが悪く軟質。
- 18 淡黄色真砂(2.518/3) 混合土で非常によく締まる。
- 19 にぶい黄色粘質土(2.516/4) 真砂ペースで非常によく締まる。
- 20 にぶい黄色混合土(2.516/4) 粘質土。砂が多く、サラサラとしている。軟質。
- 21 にぶい黄色粘質土(2.516/4) 粘性強く、よく締まる。
- 22 淡黄色真砂(2.518/3) 白色砂粒を多く含む。
- 23 にぶい黄色粘質土(2.516/4) やや赤みが強い。
- 24 にぶい黄色混合土(2.516/4) 混合土に近い。
- 25 にぶい黄色粘質土(2.516/4) 混合土に近い。

3段階

- 26 淡黄色真砂(2.518/3)
- 27 明黄褐色粘質土(10186/6) 非常によく締まり硬質。
- 28 淡黄色真砂(2.518/3) 長質な粘土で軟質。
- 29 明黄褐色粘質土(10186/6) 真砂ペースで粘質土が均一に塊状を呈し、よく締まる。
- 30 明黄褐色混合土(10186/6) 真砂ペースで粘質土が均一に塊状を呈し、よく締まる。
- 31 淡黄色真砂(2.518/3)
- 32 淡黄色真砂(2.518/3)
- 33 淡黄色真砂(2.517/4)
- 34 淡黄色真砂(2.518/3)
- 35 明黄褐色粘質土(10186/6) 塊状を呈する。
- 36 淡黄色真砂(2.518/3)
- 37 明黄褐色混合土(10186/6) よく締まる。





第11図 第12トレンチ実測図 (1/60)

3段階は26層～37層までで、全体が赤褐色を呈し、11層4枚に分層された。赤粘土・赤粘土ベースの混合土と淡黄色真砂を用い、赤粘土を多用する。粘土と真砂は同等均一に混合されて、工区全体に水平分布している。

4段階は12層～25層までで、全体が黄褐色を呈し、14層4枚に分層された。黄褐色粘土・黄褐色粘土ベース混合土と浅黄色真砂・淡黄色真砂を用いる。他の段階では谷側外端部は全て赤粘土を用いるのに対して、この段階のみ黄褐色粘土を多用しているのが特徴である。赤粘土と黄粘土との用法の違いに意図性（機能差）があるのか、他所の土塁では如何なる状況なのか、今後の検討課題としたい。

5段階は3層～11層までで、全体が赤褐色を呈し、9層3枚に分層された。赤粘土と真砂・真砂ベース混合土を用い、真砂が主体となる。粘土系の土壌を谷側外端部に厚く積み、内側に傾斜を持たせている。

なお、本トレンチでは基底石の前面に版築土塁構築時の所産と考えられる石組みの前面柱穴が確認された^(註2)。柱痕径は20cm、深さは50cm、基底石前面から柱痕中心までの距離は約30cmを測る。

(小鹿野亮)

註2 小田富士雄先生からご教示を頂いた旨を担当者から聞いた。

第11及び12トレンチの版築土層中に見られる凹凸痕跡の径（第12～15図、第1～3表）

版築土中の赤粘土上面に認められる波状の凹凸について、状態の良かった第11トレンチ北壁及び第12トレンチ南壁のものを計測して最頻値を計算し、版築を行なった際の突き棒の径を推定することとした。

計測した数値は第3表に示したが、全て層位に向かって左から計測したものである。

第12トレンチの1段階（59～66層）では平均7.43～9.25cm（全体の平均値7.83cm）、同2段階（43～49層）では6.33～7.14cm（全体の平均値6.93cm）、同3段階（27～35層）では6.17～7.85cm（全体の平均値6.83cm）となり、第12トレンチ全体では平均値7.09cmを示す。

また、第11トレンチ（28～39層）では6.40～8.50cm（全体の平均値7.37cm）となり、7.09～7.37cmの分布幅が認められた。

第15図・第2表に示すように、比率でみても6～8cmの間に全体の73.8%（第11トレンチ北壁64.2%、第12トレンチ南壁75.7%）が集中している様子が看取でき、7.09～7.37cmは阿志岐城における版築杵の径として妥当な数値であると考えられる^(註4)。

(小鹿野亮)



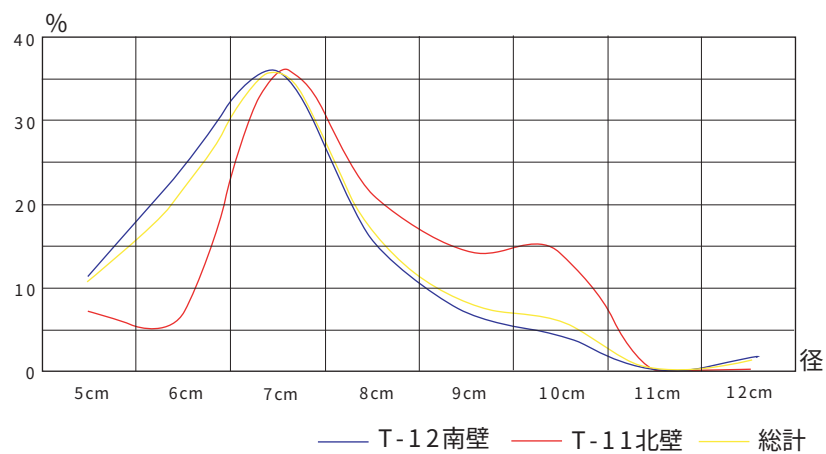
第12図 版築土層に見られる凹凸痕跡^(註3)
(第12トレンチ土層)



第13図 版築土層に見られる凹凸痕跡
(第12トレンチ平面)



第14図 古代道に見られる凹凸痕跡 (註5)



第15図 凹凸痕跡の径

単位: cm

トレンチ名	T-12			T-11
段階	1	2	3	
層位	59～66	43～49	27～35	28～39
最小値～最大値	7.43～9.25	6.33～7.14	6.17～7.85	6.40～8.50
平均値	7.83	6.93	6.83	7.37

第1表 凹凸痕跡径の集計表 (集計結果)

径(cm)	%		
	T-12南壁	T-11北壁	総計
5	11.4	7.1	10.7
6	24.3	7.1	21.4
7	35.7	35.7	35.7
8	15.7	21.4	16.7
9	7.1	14.3	8.3
10	4.3	14.3	6.0
11	0.0	0.0	0.0
12	1.4	0.0	1.2

第2表 凹凸痕跡径の集計表 (出現頻度)

場所	段階	層位	計測値（cm）	件	平均値
T-12 南壁	3	27	7,8,7,6,6,6,5,5,5,6,7,6	12	6.17
		29	6,6,5,5,9,10,6,7,6,5,8,6,5,5,7,8,7	17	6.53
		35	7,12,10,8,6,8,7,9,7,8,6,7,7	13	7.85
	2	43	9,6,7,6	4	7.00
		47	7,7,6,7,7,7,9	7	7.14
		49	7,5,7	3	6.33
	1	59	8,10,6,6,7,7,8	7	7.43
		64	7,9,8,8,7,5,8	7	7.43
		66	10,8,9,10	4	9.25
小計				74	7.09
T-11 北壁		28	9,8	2	8.50
		30	6,9,8,7,10,10	6	8.33
		36	8,7,5,7,7,7	6	6.83
		39	7,6,6,7,6	5	6.40
小計				19	7.37
合計				93	7.15

第3表 版築土中に認められる凹凸痕跡の径（突き固め痕跡）

註3 小鹿野亮（2003），古代道における路体施工の複合性―道路に残された痕跡の分別理解―，九州考古学第78号

註4 「石城山発掘時の版築杵の痕」について、向井一雄氏にご教示をいただいた。小野忠熙（1980），神籠石式山城の土塁の構造，国分直一博士古稀記念論集 日本民族文化とその周辺 考古篇p.423によれば、「石城山土塁調査の際、粘土質の土を版築に搗き締めるときに使った工具の搗き締め跡とみられる部分が、その上に盛った土が砂質であったため、発掘調査中に剥離して、搗き締め跡のある土塊を採集することができた。円形の搗き締め跡はいずれも直径7.1cmで、版築の剥離面に限なく遺っていた。搗き締め跡の痕跡面がほぼ水平位であるところから推して、この工具は木槌ではなく、樹林から伐採した径7cmばかりの思い常緑広葉樹の幹を切断した搗き棒であったのではないかと考えられる。」と記載される。

註5 筑後市教育委員会（2002），筑後市内遺跡群Ⅳ，筑後市文化財調査報告書第43集に記載される山ノ井川口遺跡SF100に見られる痕跡は古代道における顕著な事例である。なお、本写真は現場にて小鹿野が撮影したもので、比較のために参考として掲載した。

第3水門（巻頭図版3—1、4—1、5—1・2・3、写真図版11—2・3、12～16、第17図）

東側の城域を形成する尾根の、さらに東側の谷部に位置し、東側の城域の土塁線に連続して築造されている阿志岐城跡における最大規模の構造物である。平成14年に発見された後、平成15年に水門の遺構実測（1/20）を行った。その後、平成17年度に第3水門から東側の土塁線を確認するため、水門東端部の腐植土除去作業を行い、東端部が岩盤にすりつけていることが判明した（写真図版11—3）。あわせて、水門の前面には、ほとんど土砂の堆積がないことが判明したので、水門前面の清掃を行い、谷部底面を確認することができた。

谷の横断面は、逆台形状をなし水門の位置での谷幅は約20mを測る。最深部は谷の西端、東側の城域を形成する尾根の直下で標高約241mである。谷の両端部は、明瞭で底面に対して西側で約40°、東側で約75°の角度で立ち上がる。

水門を形成する石塁は、最大幅約23m、最も高さが残っているところが水門の中央部付近で約3.8mを測る。

水門上端部は、石材が抜けた跡があり、ほぼ全面的に石材が流出していると思われる。特に谷の最深部が西側に偏っているため、西側上部の崩壊が激しかったと思われる。

石材は、ほとんどが切石加工を施して長方形に加工しており、大きいものは幅2m、高さ1mを超すものもある。谷底部は、花崗岩の岩盤でその直上に大型の石を据えているが、基軸となる石は東側岩盤石と向かい合わせに据えた第17図C断面最下部の石で、この石に継ぎ足す形で順次東側に石を配列したことが窺える。また、谷底面の傾斜を水平に調整するため、この石の上面を基軸に水平化を図っていることがわかる。このあと、第二段階として、厚さの薄い長方形の切石を使って谷底全体の水平化を図っている。第三段階で、厚みのある長方形石材を使用して高さを増している。石積みは、最も多いところで7段が確認できる。

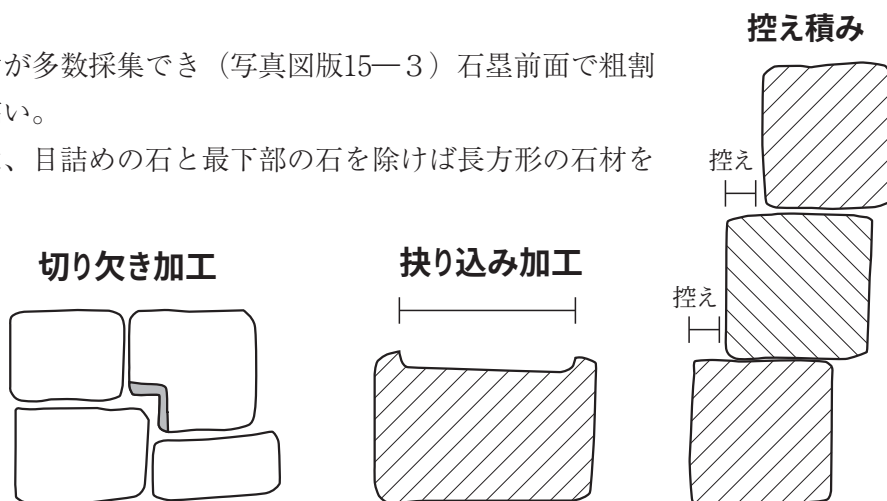
水門の断面は、約15°傾斜するが、主には控え積みにより上段に上がるにつれ数cmずつ引いて積み上げられていることに起因する。石塁の東半分は、石材が押し出されたいわゆる「孕み」が認められる。石塁上面東半分は、水門東側の尾根からの落石で埋め尽くされており、西半分は土砂が堆積しており、石塁背面の構造は不明である。

石積みは、上下左右とも精緻な調整を施し隙間がほとんど見られない。また、石材の組み合わせにあたっては、長方形石材の角をL字形に切り欠く、いわゆる「切り欠き加工」が23ヶ所確認された。また、石を上下に組み合わせるため、石の上面を挟み込む「挟み込み加工」が確認された。

水門前面からは、剥片が多数採集でき（写真図版15—3）石塁前面で粗割を行っていた可能性が高い。

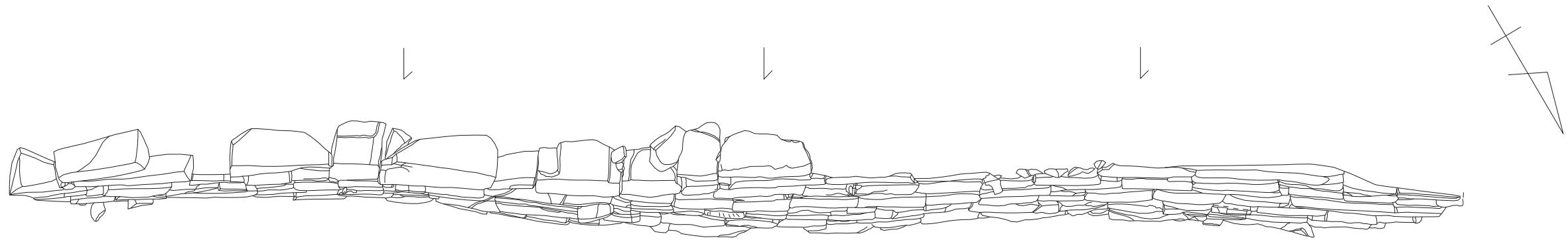
石材の使用法としては、目詰めの石と最下部の石を除けば長方形の石材を寝かせて積んでいる

が、石塁の最東端上段の石材は、台形状に立てた姿で据えられており、他の石積みと様相が異なり、特別な意味を持っていた可能性がある。



第16図 石材加工法概要図

平面



立面



第17図 第3水門実測図 (1/80)

第3節 城域正面の調査（第2図）

城域の正面を形成する土塁は、第6～第14地点の9ヶ所が確認された。また、この列石線と対面する位置に列石が発見され第4、第5地点とした。

第4地点（写真図版2—2）

東側尾根の西斜面に位置し、尾根に直交して遡上している。城域正面の土塁の延長線上に並行して対面に相当する位置にあり、約4mほど直線的に自然石が並べられている。石材は20cm大～30cm大で小振りのものを使用しており切石等の加工は見られないが、石材の面を城内側に揃えており、夾築土塁の背後列石の可能性はある。

第5地点（写真図版1—3、2—1）

第4地点と同じく、第7地点土塁の背後に約9m離れて並行に位置し、石の面を城内側に向けている。石材は大振りの自然石（40cm～50cm大）を、直線的に並べているが、石組みは荒く古代山城に伴うものかは不明であるが、第4地点と同じく夾築土塁の背後列石の可能性が考えられる。また、第4地点とは幅約30mの小さな谷を挟んで位置しており、谷の両端に夾築土塁が存在しているのならば、谷部に水門があった可能性が想定出来るが、現状では確認できなかった。

第6地点（写真図版2—3）

林道直下で列石の一部が、幅約2m程度露出していた。石材は、加工度の弱い切石で全貌は把握できなかったが、ボーリングステッキにより、基底石の前面張出は確認できた。列石上部の土塁は、林道拡幅の際に削平を受け数十cmを残すのみである。

第7地点（写真図版3—1・2）

列石の一部が、幅約2mほど露頭していた。林道は、これまでの地点で全て土塁の天端を削平して拡幅されているが、本地点で土塁の前面側を林道が削平している。また、第6地点列石との間を林道が跨いでおり、その際石材の一部が割り取られている。

列石石材は、切石で方形加工の2段積みで精緻な石積みをしており、高さ約80cmを測る。基底部は方形切石の基底石が列石前面から約18cm張り出している。

列石前面の削平を受けた部分の断面（写真図版3—2）を観察すると、列石前面に真砂土が堆積しておりあまり強く締まっていはいないが、層位は表面より列石側の方が低く傾斜しており、列石の被覆土の可能性はある。

第8、第9地点

林道直下に、列石の一部が露出していることが確認された。ボーリングステッキにより、第7地点に連続することは確認されているが、西側の第2水門への接続は確認出来なかった。

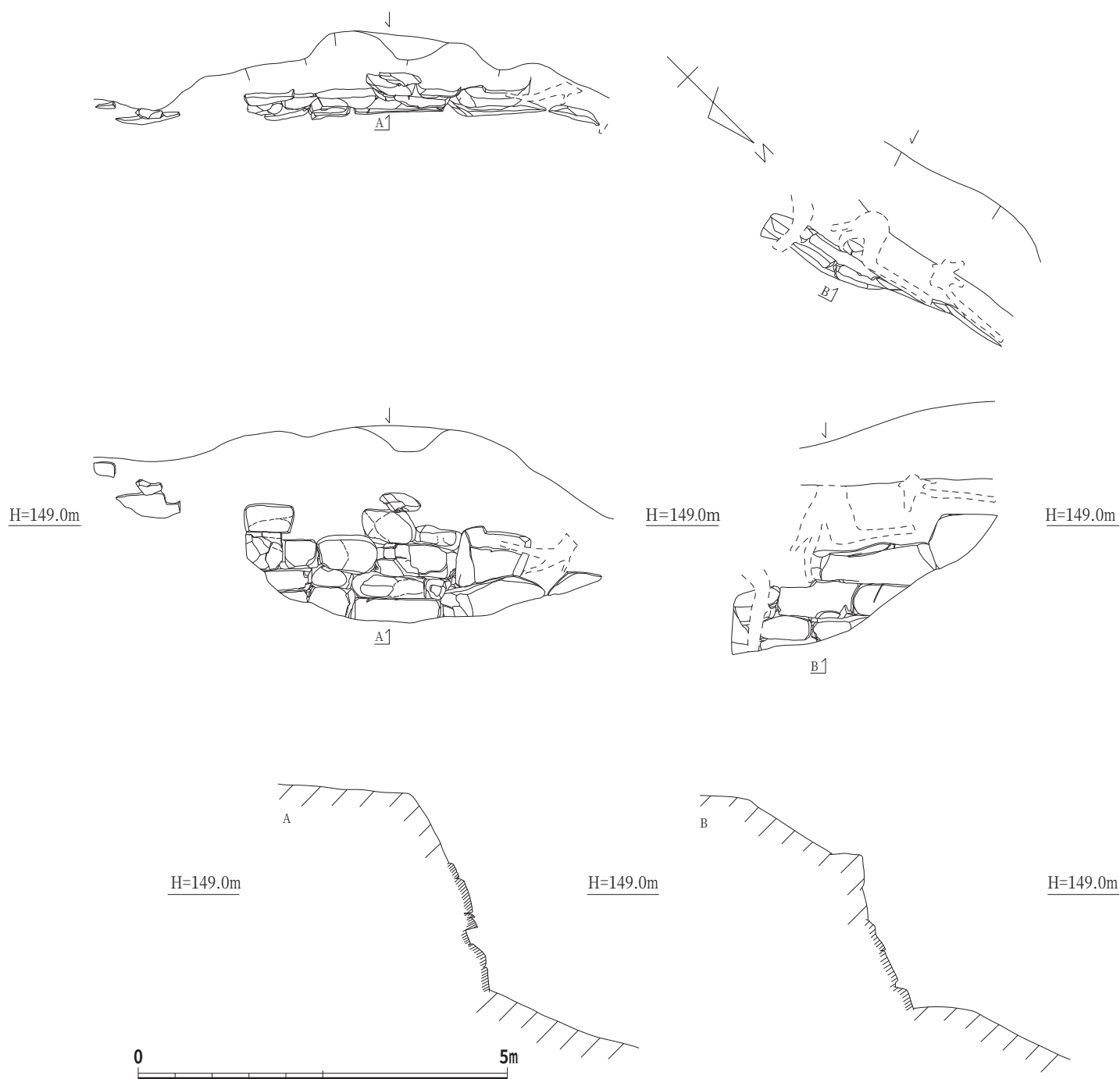
第2水門（写真図版4—1～3、第18図）

城内東側の中央に位置する谷の谷頭に位置する石塁で、中央部が大きく流失しているが、確認できる範囲では全幅約12m、高さ約2.6m、石塁天端で標高149mを測る。石塁は、未加工の1mを超える大きい方形自然石を使用し、現状で4段の石積みが確認される。石塁の高さは約1.6m

を測るが、石罫の下流側に石罫に使用されていたと考えられる石材が多数散乱しており、現存する石罫よりもさらに1～2段高かった可能性が強い。

石罫の傾斜は、約80度前後を測る。水門は、谷に直交して直線的に築造されているが、中央部で約33.5°屈曲している。石罫背面は、一面土砂が堆積しており背面構造は不明である。水門西側の尾根は、ボーリングステッキによる観察で全面が岩盤の壁面をなしていると想定される。

谷部を遮断する位置に築造されていることから、水門機能を持つと考えられるが、今のところ水口等は確認されていない。



第18図 第2水門実測図 (1/80)

第10地点

第2水門を見下ろす林道直下に、列石が露頭している。列石上部の土塁は林道によって削平を受け、数十cmを残すのみである。ボーリングステッキの観察から、土塁線が第2水門に直接接続していないと思われる。

第11地点

林道直下に、列石の一部が露頭しており、列石上部の土塁は林道によって削平を受け数十cmを残すのみである。

第12地点（写真図版5—1～3、第19図）

中島氏が最初に発見した地点で、尾根の稜線直下の急斜面に列石が全長約7mにわたって露出している。列石は、花崗岩を長方形に切石加工したものを1段ないし2段積みし、基底石の上面から約60cm前後の高さで上縁を揃えている。

列石最下部には、前面の面から約20cm前後の張り出しを持つ厚さ約10～20cmの扁平な基底石が据えられており、本遺跡に於ける列石構造の大きな特徴の一つとなっている。列石の石組にあたっては、数ヶ所に切欠加工が施されていることが確認される。

列石の上部は、尾根の斜面に内托法で高さ約2mの土塁が築かれ、天端は幅約2.3m前後の平坦面がある。基底石上面から土塁の肩までの高さは約2.6mから3mを測る。土塁前面の傾斜は約50°前後で、土塁形状を良く残している。列石の平面ラインは、直線的で途中から「折れ」を持っている。折れから第13地点側は土塁が完存しているが、第11地点側は林道によって削平を受けている。また、折れの部分の基底石が押し出されるように崩れているが、列石前面の斜面に大きな土砂崩れ、地滑りの痕跡はないことから土塁築造に伴う折れ部分の繋ぎ方に要因が求められる可能性があり、折れ部の築造技術を窺いしることが出来る。

第13地点（写真図版6—1）

第12地点の延長部で、細く延びた尾根の先端部にあたり二石が直線に並ぶ。露出した列石は、第12地点と同様の張り出しを持つ基底石の上に、1段積みの長方形切石が据えられている。

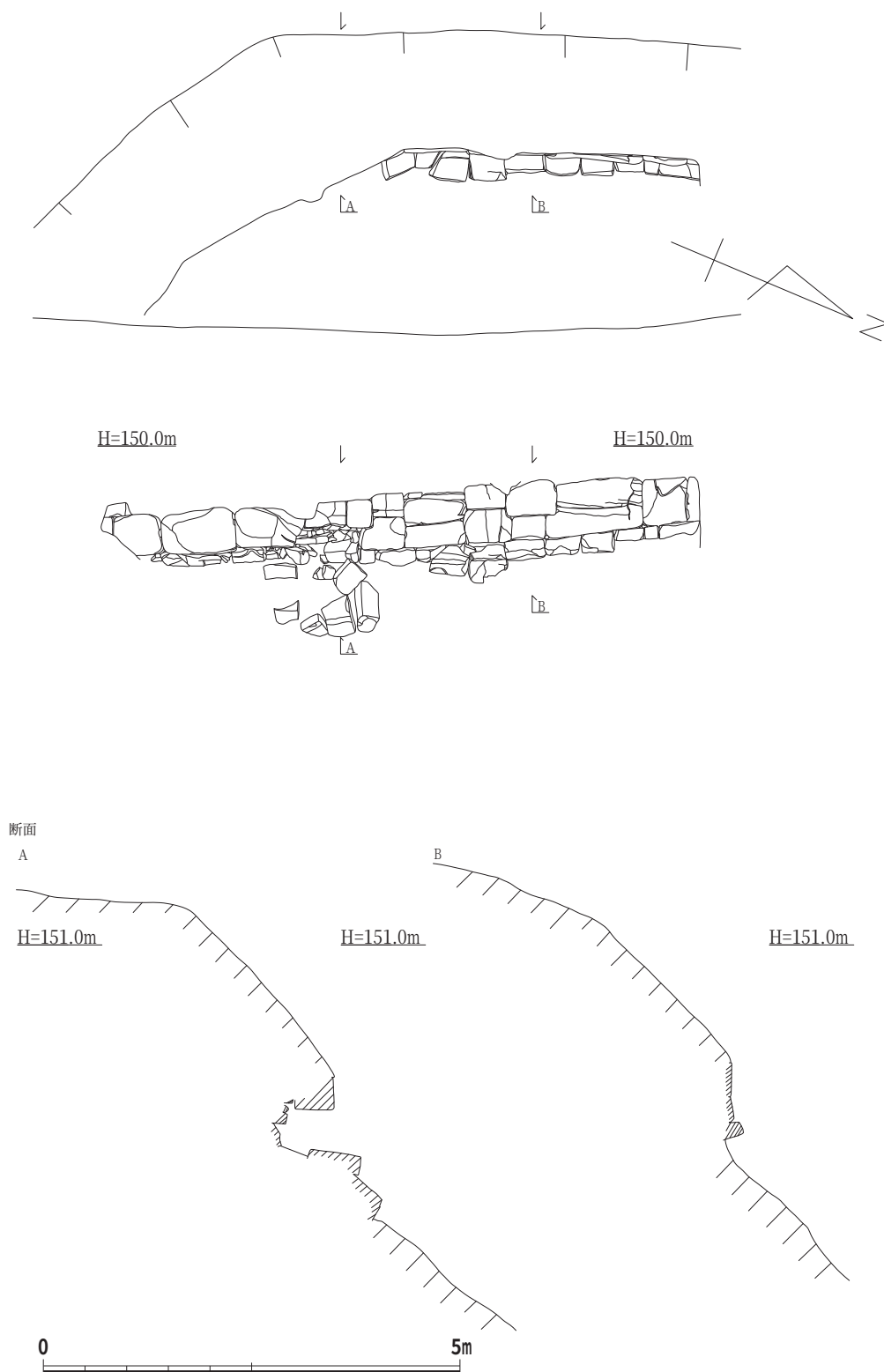
上部の土塁は明確には確認できなかったが、本地点が尾根先端部の頂点にあたり、第12地点との位置関係から90°に近い角度で折れている可能性がある。

第14地点（写真図版6—2）

第13地点の西側に連続する列石で、13地点列石とほぼ同じ構造である。なお、第13地点と第14地点の間は大きく土砂崩れのため流出しており現存しない。

第1水門（写真図版7—1、第20図）

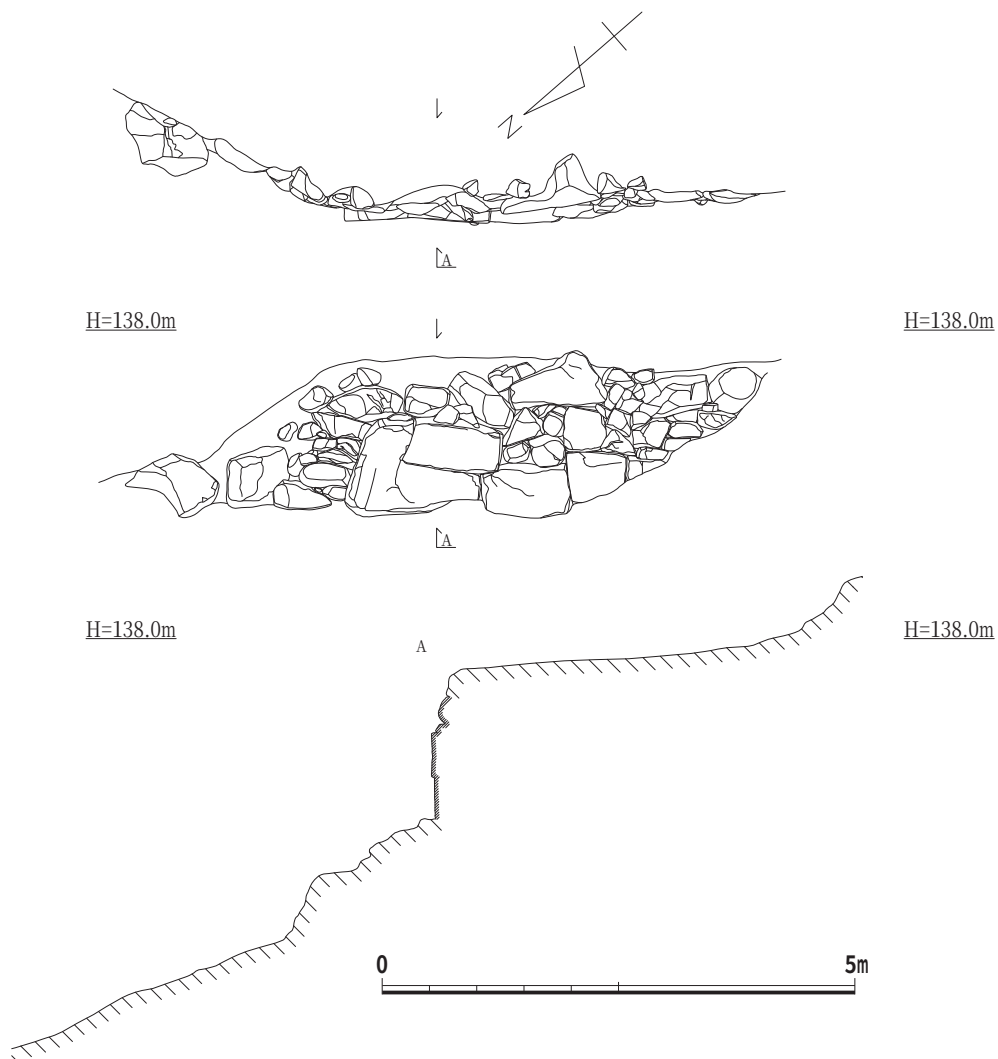
杉の谷川によって浸食された標高約138mの谷部に位置し、石塁の大半は既に流失しており現在は杉の谷川左岸側に約5m程が残っているだけである。石塁は、基底部に1m×1.5m程の大きさの石材を据えているほかは、自然石を大小取り混ぜて積み上げており、切石等の加工は認められない。石塁前面の面はほぼ垂直に立ち上がり高さは約1.7mで、石塁上部に土塁は認められなかった。石塁背面は完全に埋没しており、構造は不明である。



第19図 第12地点土塁実測図 (1/80)

第1水門がある杉の谷は、阿志岐城跡に内包する谷のなかで最も大きく、杉の谷は現在も砂防ダムが設置されているように土石流が発生するほどの川で、水門の大半が流失していることは想像にかたくない。

しかしながら、谷の両岸の土塁の位置から見てわずかに残るこの石塁を第1水門としたものの、石材の使用の仕方、積み方などが第2水門と比較しても異なっており、阿志岐城に伴う水門と断定するには本格的な調査が必要である。



第20図 第1水門実測図 (1/80)

第15地点

第1水門の西に、聳える尾根の斜面を遡上して標高約150m附近から、尾根稜線に向かって伸びる列石で、列石頭部がわずかに露出していることが約5m確認できる。列石は、大半が埋没しており形状等の詳細は不明で、列石上の土塁も明瞭には確認出来ない。第1水門から本地点までの土塁線は確定できなかった。

城域外東側尾根の調査（写真図版7－2・3）

東側尾根の先端部より、さらに北側に細長く延びる尾根に花崗岩の石材が露頭している箇所に確認のためトレンチ調査を行った。トレンチは、尾根の背陵部を縦断する第14トレンチと、これに直交するサブトレンチ第15～第21トレンチを設定した。

調査は、人力で掘削したが、表土直下で地山真砂土に達し、遺構は確認されなかった。また、露頭石についても、自然石の集積であり遺構に伴うものではなかった。

第4節 西側城域の調査（第21図）

西側の城域は、宮地岳山頂西のピーク（標高約330m）から北に向かって延びる屋根主稜線の西側斜面に土塁を築造している。土塁線は、屋根の主稜線の西側斜面に並行して第16地点から確認でき、第22地点まで断続的に列石が確認される。

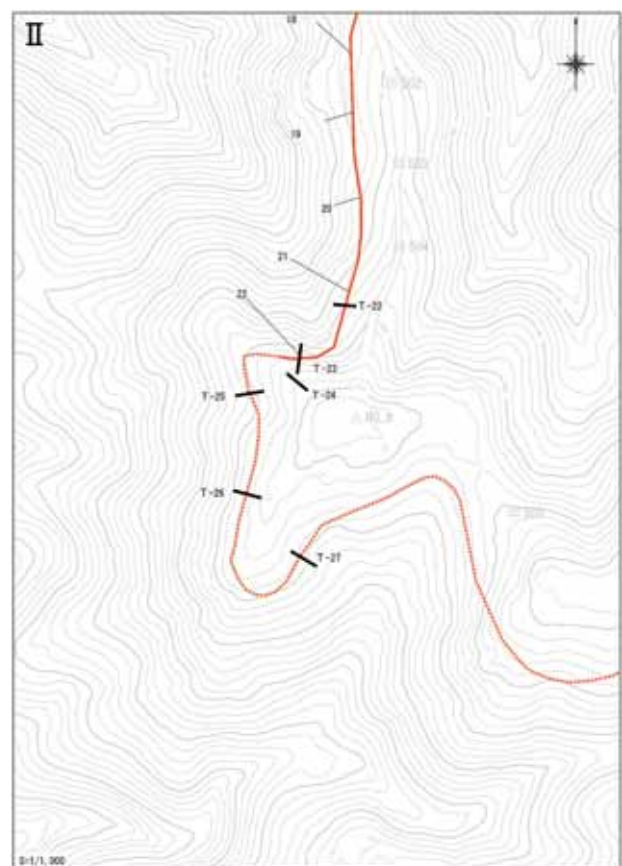
第16地点（第22図）

西側の尾根先端部の標高約183.6mの地点から、尾根の主稜線に添って遡上する列石が約9m程が確認される。列石は、基底部が埋没しているが概ね1段積で構成されているが、一部2段積みがある。高さは、30cmから70cm程と不揃いで列石上面を揃える意図が余り感じられない。基底石は、扁平な方形切石を用い、確認できるところでは列石の面から約23cmほど張り出している。石材の加工度は低く、正面の城域や東側の城域の列石とは大きく異なる。

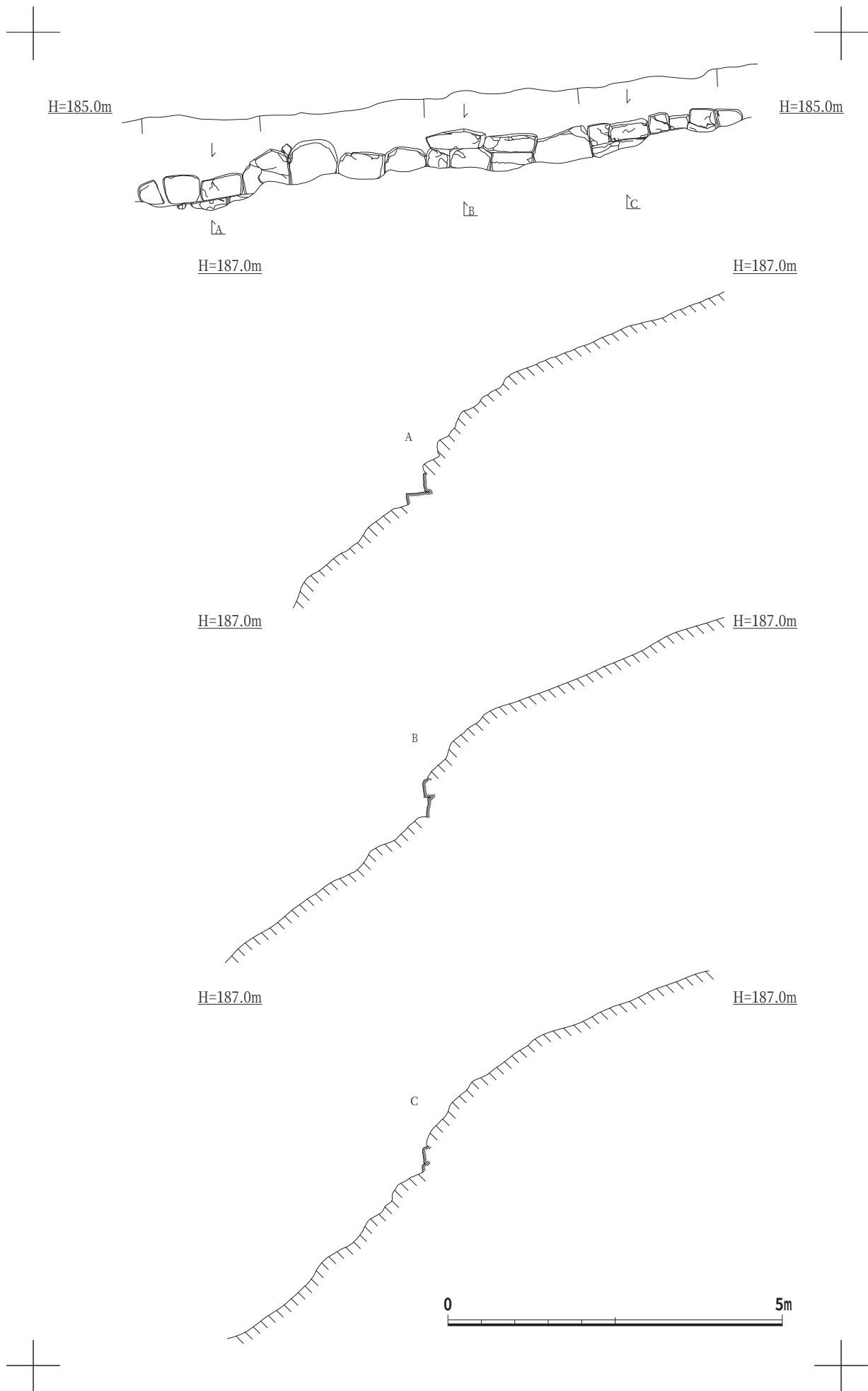
土塁の高さは約1.0mから1.6m前後で、土塁前面の傾斜角度は50°から60°で、天端平坦面は不明瞭である。尾根斜面の傾斜度は、35°から45°で、東側城域の立地と比較して緩い傾斜である。

第17・18・19・20・21・22地点

第16地点土塁の延長線上の、第17地点から第22地点まで各地点で列石が部分的に露出している。また、各地点間はボーリングステッ



第21図 西側城域トレンチ配置図



第22図 第16地点土塁実測図 (1/80)

キによる観察で、列石が連続していることが推測される。第21地点を除き、列石上部の土塁形状は不明確で、天端平坦面を明確には確認できなかった。

第22トレンチ（巻頭図版11—2・3、12—1～3、第23・24図）

西側の城域では、唯一土塁形状が明瞭に確認できる地点で、ボーリングステッキによる列石の追跡が困難になったためトレンチ調査を行い、列石と版築土塁を確認した。

土塁は、尾根に添って約30m程直進し、L字状に曲がる尾根にぶつけるように平坦面が消える。

トレンチは幅80cmで、標高約196mの尾根西側斜面の土塁を断ち割る位置に設定した。検出された列石は、扁平で方形に加工した基底石の上に方形切石を二段に積んでおり、基底石上面からの高さは約68cmである。基底石は、厚み約18cmで、列石の面より約18cm張り出している。

土塁の高さは、肩部で列石上端から約1.2m、基底石上面からは約1.8mを測る。肩部は流出しており、尾根側の天端高から復原すると、列石上面から約2.4m前後、基底石上面からの高さ約2.7m程度あったものと考えられる。土塁天端は、幅約3.3mで背後の尾根主稜線頂部から約5m、列石前面までの距離約8mを測る。基底石上面から、尾根主稜線頂部までの高低差は約5mである。

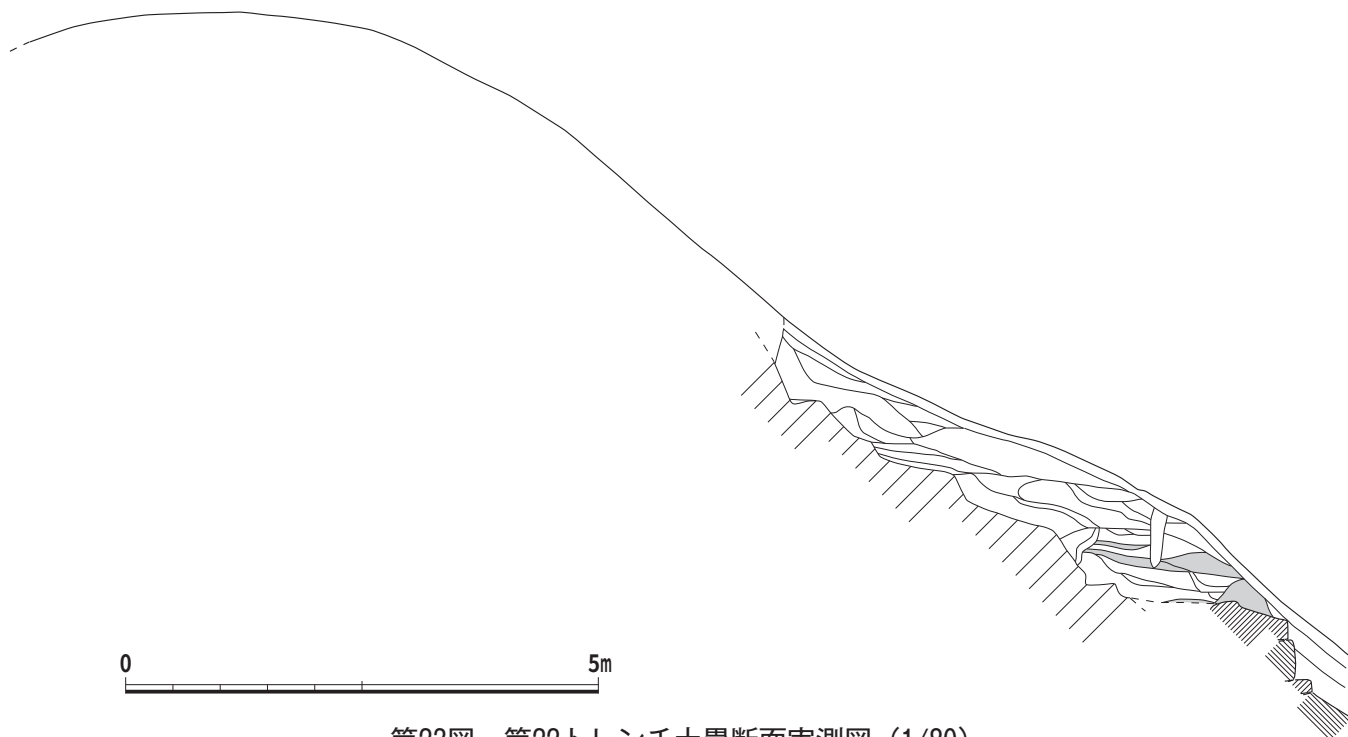
土塁の築造は、尾根の山腹を階段状に地山整形し、最下段に基底石を据えた後、方形に切石加工を施した列石を据え裏込めを入れる。盛土は、土塁前面あたりに列石の上に暗赤褐色粘土を盛り上げた後、その背後に真砂土を入れ粘土の高さと同じになったところでまた、暗赤褐色粘質土を盛り上げる。背面で突き固める真砂土が前面に流出しないよう粘土を使い分けし、土塁を突き上げていく。全体には、4段階の作業が行われたと思われる。

第23トレンチ（写真図版8—2・3）

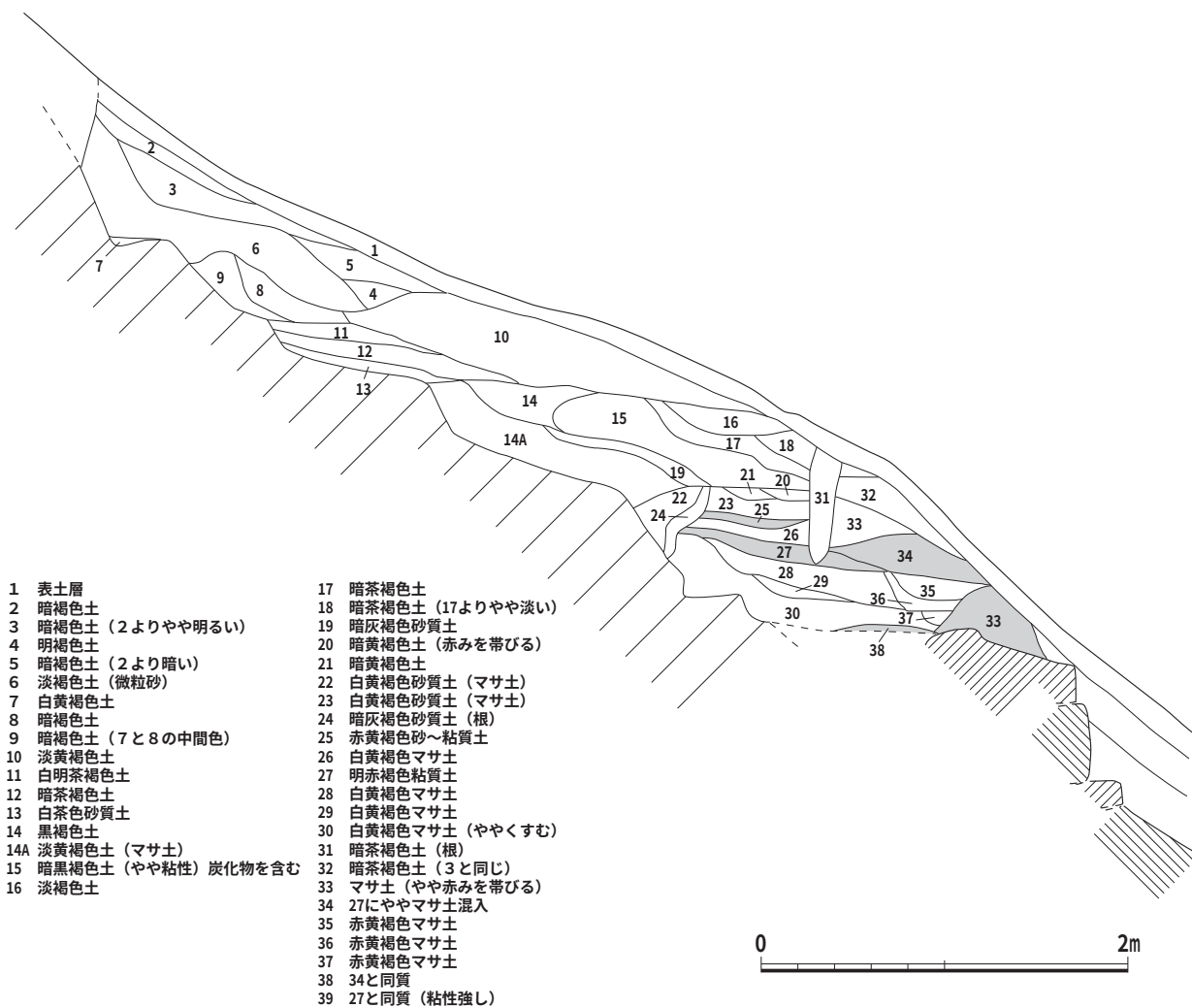
第22トレンチで土塁が確認されたが、L字状の尾根にぶつかった後の土塁線が消えることから、その後の列石の行方が確定できなかった。L字に曲がった尾根の斜面は約65°前後の急峻な斜面で、土塁の痕跡はまったく認められなかった。このため、ボーリングステッキで石が観察され、列石の存在が想定されることから、幅約50cmの確認用のトレンチを設定し、表土層直下から列石を確認した。列石は、二段積みで基底石を伴い尾根の斜面を遡上している。

第24・25・26・27トレンチ（写真図版9—1～3）

第22トレンチでは列石が確認できたが、その延長線上でのボーリングステッキによる確認をおこなったが特定することはできなかった。このことから、第21地点から第22地点にかけてL字状に曲がった列石が、連続すると想定される地点に第24から第27トレンチを設定した。第24トレンチは、地表面に列石状の石材が露頭（写真図版9—3）していたことから表土除去をおこなったが、自然石の露頭であることが確認された。また、第26、第27トレンチは、斜面に土塁天端状の平坦面が認められたため調査をおこなったが、いずれも自然堆積によるもので土塁は確認できなかった。



第23図 第22トレンチ土層断面実測図 (1/80)



第24図 第22トレンチ版築土層実測図 (1/40)

第5節 山頂部周辺の調査（第2図）

西側の城域では、第22地点で土塁線が確認できなくなり、東側の城域では、第3水門から東側には土塁線が確認できなかった。しかし、他の神籠石系山城が山頂部を取り囲んで城域としていことから、本城においても山頂部を取り込んでいた可能性が想定できる。このため、東西城域の尾根を山頂まで引き延ばした想定線に対しての踏査を繰り返し実施し、調査地点を絞り込んだ。

石切場跡（写真図版17—1～3、18—1～3、19—1・2）

踏査の際、矢穴跡の残る石材が確認されており、表面を覆っていた倒木や枯れ枝、腐植土を清掃したところ、約35m×25mの範囲で多数の矢跡が残る石材が散乱しており石切場であったことが確認された。石切は、露頭する場所数ヶ所で作業しており、矢は、幅約2cm、厚さ8mm程度のものなど数種類が認められた。また、一部にはドリルによる痕跡もあった。地元中阿志岐の井上清高氏によれば、戦後の一時期まで地元中阿志岐、天山などに石工があり、石材の切り出しがおこなわれていたとのことである。

宮地岳山中には、花崗岩の巨岩が露頭しているところが多く有り、本城築城に伴う石材の供給は、宮地岳山中から供給されていたことは間違いないと考えられるが、石材の加工がどこで行われていたのかは確認できていない。

第28、第29トレンチの調査（写真図版19—3）

城域推定線上にあたり、尾根が土塁状に切り立った箇所に直交して設定したが、表土層直下において地山が検出された。

第30トレンチの調査（写真図版20—1）

城域推定線上に近い花崗岩露頭箇所の前面にトレンチを設定したが、花崗岩の転石が斜面に貼り付いた状況で出土し、土塁は確認できなかった。

第31、第32トレンチの調査（写真図版20—2・3）

城域推定線の城外側に降った谷部に、谷部を横断する石列が認められたため、トレンチを設定した。第32トレンチは、谷の中心線上に設定し、第31トレンチは、推定線から谷に向かう斜面に設定した。谷部では、黒褐色土の厚い堆積があったものの淡黄褐色粘質土の基盤が確認され、共に土塁、石塁等の遺構は確認されなかった。

第33トレンチの調査（写真図版21—1）

城域推定線上で、山頂西のピークから延びてきた尾根の先端部にあたり、瘤状の先端部の基部を直線上に整形し、周囲を帯曲輪状に平坦面を巡らした地形が確認されており、その城外側にトレンチを設定した。トレンチは、帯曲輪状の平坦面も含めて設定したが、谷斜面に転石があったものの、土塁状の遺構は認められなかった。

第34トレンチの調査（写真図版21—2）

山頂西のピークから延びてきた尾根の先端部にあたり、巨岩の露頭箇所を迂回し、L字状に曲がった切り通し道を調査した。

切り通しの両側に切石状の石が露頭しており、門跡の様相を呈していたが、調査の結果自然石の露頭であることが確認された。

第35、第36トレンチ（写真図版21—3）

山頂西のピークの南尾根に、列石状の露頭箇所にトレンチを設定したが、共に岩盤の露頭であった。

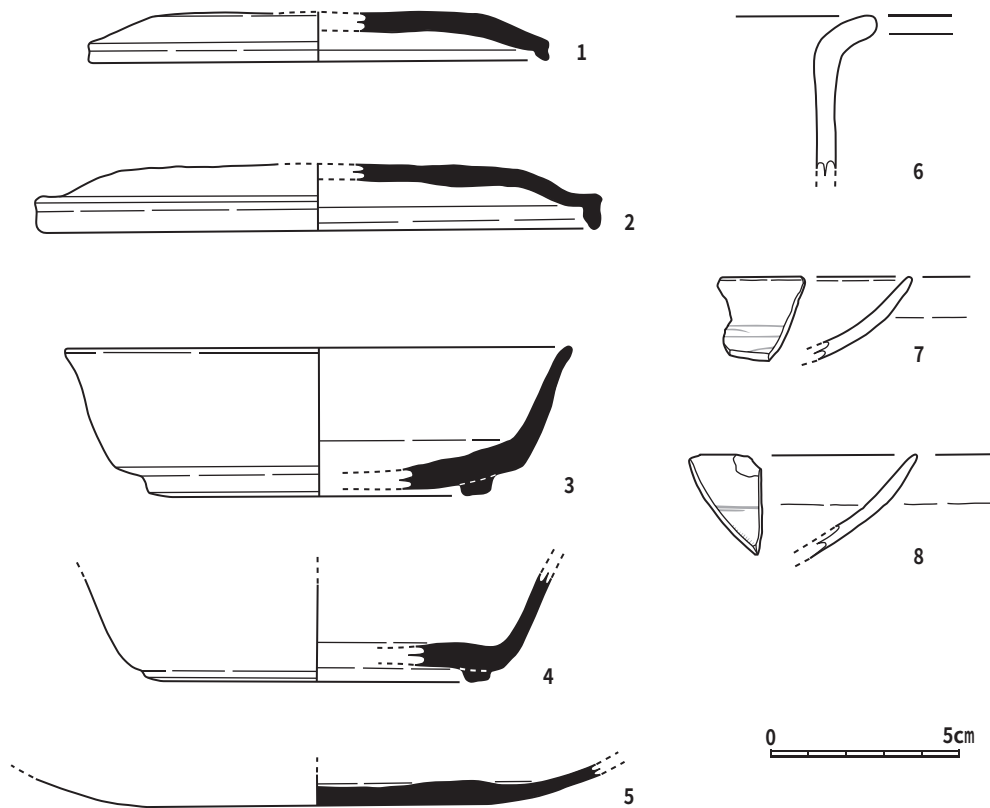
第37トレンチ（写真図版22—1～3）

宮地岳山頂と西のピークを繋ぐ馬の背状鞍部に、断面台形を呈する土塁がやや蛇行しながら約28mにわたって縦断している。また、馬の背状鞍部は西の尾根と東の尾根を繋ぐ形で、杉の谷を囲む一角をなしており、山頂部と西のピークと共に宮地岳の山頂稜線を形成し、これより南側の山家地区と北側の阿志岐地区の分水嶺となっている。

土塁は、高さ約0.6m、上辺幅約0.5m、下辺幅約1.3mを測りる。トレンチは、馬の背状鞍部のほぼ中央に土塁に直交して幅約0.8m、長さ約18mにわたって設定した。馬の背状鞍部は、表土層直下で地山が検出され、トレンチ内には柱穴等の遺構は確認されなかった。土塁は、表土層の上に築造されたもので、真砂土を不均等に盛土しており締まりもあまり強くない。

遺物等の出土はなく、時期を特定することはできなかったが、盛土が確認されている版築土塁とは大きく異なっており、古代山城関連の遺構である可能性はきわめて低いと思われる。

第6節 出土遺物（第25図、写真図版24・25）



第25図 第3水門等出土遺物（1～5はS1/2、6～8はS1/1）

遺物No.1～5は須恵器、6は土師器、7と8は青磁である。いずれも小片が多い。1～5と7・8については第3水門谷側表土、6については第3トレンチ表土から出土した資料である。なお、2と3は岩盤直上からの出土である。

1及び2は須恵器蓋で、双方とも撮みの有無は不明である。1は、口縁端部は三角形状を呈し、ナデによる調整を施す。天井部は低く平坦で、器高1.3cm、復元口径12.2cmを測る。色は明灰色で、焼きは良く、胎土には微量の白色砂粒を含んでいる。2は、口縁端部はやや屈曲が強い三角形状を呈する。天井部は低く平坦で、ケズリ後に一部未調整である。器高は1.7cm、復元口径15.0cmを測り、焼きは良く、色は灰色。

3及び4は須恵器坏cである。体部はほぼ直線的に立ち上がり、屈曲部のやや内側に低い断面長方形の高台が貼付される。3は、復元口径13.4cm、器高3.9cm、復元高台径9.2cmを測る。色は暗灰色で、焼きは良く硬質、胎土は概ね精良である。4は、残存高2.9cm、復元高台径9.3cmを測る。色は灰色を呈し、焼きはややあまい。胎土は概ね精良であるが、微量の白色砂粒を含んでいる。

5は須恵器で器種は皿と考えており、残存高1.0cm、復元底径9.0cmを測る。色は灰色、胎土は概ね精良であるが、焼きが悪いうえに摩滅が著しい。なお、他に土師器（坏×皿）、須恵器（坏×皿）が出土しているが、いずれも小片であったため、写真図版にのみ掲載した。

6は土師器小甕で、色は赤褐色、胎土には白色粒を含む。口縁部は弱く外反しており、体部は欠失しているがほぼ直線的に立ち上がっているものと考えられる。摩滅が著しい。

7及び8は同安窯系青磁の皿で、同一個体の可能性がある。口縁部は薄く尖り気味で残存部分全体に施釉する。釉は薄い青緑色で光沢があり、胎土は精良で、焼きも良い。内面には櫛による点描文と横沈線が施される。

（小鹿野亮）

第4章 総 括

第1節 城名についての検討

平成11年、古代山城研究会によって発見された筑紫野市阿志岐の神籠石系山城は、当初「阿志岐城跡」として発表された。その後、城名についてはあらためて検討することとし、当面は調査事業の名称として「宮地岳古代山城跡」を使用してきた。本稿では、この城名について歴史的検討をおこない、名称を『阿志岐城跡』とした経緯について述べる。

1. 山名と地名表記の変遷

阿志岐城跡は、地理的には筑紫野市の中央部より少し北東に寄ったところの宮地岳山中にある。この山は大字吉木、阿志岐、天山、山家に跨る標高338.9mの独立峰で、山名は慶応元年（1865）、山頂付近に勧請された宮地嶽神社を起源とするものと思われる。明治33年（1900）の陸測図には「宮地嶽」と記されているが、いつしか「岳」に変わって現在に至る。

宮地嶽と呼ばれる以前は「あまやま」といわれていた。福岡藩の儒学者貝原益軒は『筑前国続風土記』のなかで「藻塩草に、雨山を筑前とす。古歌あり。然れば此天山の事なるへし。天山村の上に天山と云山あり。」として、雨山を現筑紫野市の宮地岳に比定している。天保14年（1843）、秋月藩士の大蔵種周が測図した「御笠郡天山村柴田故城之図」には、戦国期の柴田城の後方に宮地岳が描かれており、その山頂より少し下った所に「天ヶ城」という城名が記されている。また、『筑前国続風土記附録』天山村の項には「村の東に山あり。天山といふ」。『太宰府旧蹟全図・南図』（1812年写）には「天山 名所也。ドウナンクハン女」とある。これらの史料から、天山という山名は中世にまで遡ること、近世においては徐福伝説にちなむ山腹の童男卯女船繫石を中心とした山域が名所といわれていたことがわかる。

では、天山と呼ばれる以前はどのような名称であったのだろうか。

文明12年（1480）、戦国の筑紫を旅した連歌師の宗祇は、長尾（飯塚市）から米ノ山を越え、太宰府の天満宮を目指す途次「世の中は阿しき山路に乗駒のふみもさためぬ身にこそ有りけれ」（『筑紫道記』）と詠んだ。この「あしき山」については、のちに宗祇自身が『名所方角抄』のなかで「三笠山より東也。あしき山より府中へ三里也。」と記している。青柳種信（福岡藩士。国学者）は名所方角抄を引用しながら「大石、香園等のあたりの東南の山々をすへてあしき山と云に似たり。」（『筑前国続風土記拾遺』）とし、御（三）笠山（＝宝満山）の東側の山、つまり大根地山から米ノ山峠あたりを「あしき山」と考えている。伊藤常足（古物神社神主。国学者）も古人に従い「悪木山は御笠郡阿志岐・吉木両村の東北に在りて今は米ノ山と云なり。此山穂波郡茜山又本郡竈門山につづきて大なる山なり。米ノ山は御笠・穂波両郡ノ堺に在て今は穂波郡に付ケリ。あしき山を安志岐と天山との間にある山なりとするは違へり。是はいとちひさく又古の官道のすぢにもあらず。」（『太宰管内志』）として種信と同様の見解を述べている。さらに、安志岐と天山との間にある山、すなわち現宮地岳をあしき山に当てる説を否定しているが、その明確な根拠は示されておらず、おそらくあしき山を米ノ山に比定した結果のことであると思われる。しかし、図らずもこの記述によって現宮地岳をあしき山とする説もあったことが看取されるとともに、中～近世においてはあしき山はすでに過去の呼称となり、その場所を特定することは困難となっていたことが伺われる。

次に、「あしき」の地名表記がどのように変化してきたのかを辿ってみよう。

現在、阿志岐・吉木といわれている地域は、それぞれ近世の阿志岐村、吉木村の範囲を踏襲したものであるが、吉木が阿志岐から分かれたのは慶長年間（1596～1615）のことで、それ以前は阿志岐一村であったという（『筑前国続風土記拾遺』）。

延慶3年（1310）頃の撰とされる『夫木和歌抄』巻二十には「うきことをおもひつくしのあしき山なげ木こりつむ年やへぬらん」^{（註1）}の歌が収められており、詞書には「悪木」と表記されている。

弘長元年（1261）頃の成立とされる『弘長百首』^{（註2）}には、寂西の「玉くしげあしきの川の瀬をはやみあけ行く月の影ぞながる」と、基家の「ふる雨のくもる五月のたまくしげあしきの川は水まさるらし」の歌が収められている。原典では「あしき」がどのように表記されていたのかわからないが、写本では「悪木」「葦木」などが宛てられている。

歌以外の記録類では、『安楽寺草創日記』に長和4年（1015）、阿志岐御封153町4反72歩が安楽寺（現太宰府天満宮）の西堂に寄進された記録^{（註3）}があり、現在も通用している地名表記が使われている。以降、鎌倉～戦国期をとおして阿志岐は安楽寺の荘園となっていた。別の表記では「安志岐」^{（註4）}が用いられている。

2. 蘆城駅家

昭和53年（1978）、筑紫野市御笠地区の農地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査で、大字吉木の水田下から9棟の掘立柱建物跡が検出された。そのなかで最も大きい建物は、2間×5間の本棟に南側を除く三面に庇を設け、西側にはさらに孫庇が付いた建物であった。本棟は梁行約3.6m（12尺）、桁行約8.25m（27.5尺）で、底部分までを含めると約7.5m×約10.0mの規模である（遺構は水田下に保存）。この建物群の性格は、すでに本調査前年の予備調査の段階で、『万葉集』に歌われた蘆城駅家跡と推定されていた^{（註5）}。

蘆城駅家は、大宰府から米ノ山峠を越え、田河道^{（註6）}の各駅家を経て都へ至る第一番目の駅であるが、『延喜式』には記載されておらず、『万葉集』に収められた神亀・天平年間の9首の歌だけに見えることから、存在した期間は奈良時代前期であり、おそくとも平安時代前期には廃止さ



第26図 御笠地区遺跡A地点掘立柱建物跡



第27図 御笠地区遺跡A地点から宮地岳を望む

れていたものと考えられる。これは発掘された建物群の年代ともほぼ一致している。また、その場所が阿志岐城跡の正面直下にあることはたいへん興味深い。

次に、『万葉集』に載せる9首^(註7)を掲げる。これは史料にみえる「あしき」の初出でもある。

五年戊辰（728年）、大宰小貳石川足人朝臣の遷任するに、筑前国蘆城驛家に餞する歌三首

549 天地の神も助けよ草枕旅ゆく君が家に至るまで

550 大船の思ひたのみし君が去なばわれは恋ひむな直に逢ふまでに

551 大和路の島の浦廻に寄する波間も無けむわが恋ひまきは

右の三首は、作者未だ詳らかならず

大宰帥大伴卿、大納言に任けられて京に臨入むとする時（730年）に、府の官人等、卿を筑前国の蘆城驛家に餞する歌四首

568 み崎廻の荒磯に寄する五百重波立ちても居てもわが思へる君

右一首、筑前掾門部連石足

569 韓人の衣染むとふ紫の情に染みて思ほゆるかも

570 大和へに君が立つ日の近づけば野に立つ鹿も響みてそ鳴く

右二首、大典麻田連陽春

571 月夜よし河音清けしいざここに行くも去かぬも遊びて帰かむ

右一首、防人佑大伴四綱

大宰の諸卿大夫と官人等と筑前国の蘆城驛家に宴する歌二首

1530 女郎花秋萩まじる蘆城野は今日を始めて萬代に見む

1531 珠匣蘆城の川を今日見ては萬代までに忘らえめやも

右の二首は、作者詳らかならず



第28図 阿志岐の万葉歌碑

蘆城驛家の表記については、平安時代中期の写本で現存最古の『桂本万葉集』、鎌倉時代末期の写本で20巻完本としては現存最古とされる『西本願寺本万葉集』、いずれも「蘆城」とされており、他の多くの写本類でも別字は用いられていない。

3. 「蘆城」の語源

現宮地岳の山名や「あしき」の用字の変遷を現代から古代へと遡ってきた結果、地名に係る「あしき」の最も古い用例は「蘆城」であることが確認できた。では、何故この地域に蘆城という地名が付けられたのであろうか。次に、そのことについて考えてみたい。

「蘆」は水辺の地に密生するイネ科の多年生草本で、字義は「穂のないアシ」である。厳密には穂の出たアシは「葦」という。訓にはいずれもアシ、ヨシの二通りがある。「城」の字義は外敵の侵入を防ぐために、木柵（矢来）などを打ち込んで区切った一郭のところをいい、読みはキである。防塞には地域の条件によって種々の構造のものがあ、稲城・磐城・山城・水城などの名がある^(註8)。『日本書紀』垂仁天皇5年10月条には「忽に稲を積み城に作る。其の堅きこと破るべくもあらず。此を稲城と謂ふ」。また、天智天皇3年庚辰条には筑紫に大堤を築いて貯水し、「水城」と名付けた記事がみえる。これらの例から、城を修飾する稲や水は、その城の性格を表していることがわかる。そうすると、蘆城という地名は、蘆（葦）と何らかの関係がある城と考えるのが自然であろう。その関係性については現段階では明らかにし得ないが、少なくとも地名の語

源は「城」にある、という推察までは許されてよいのではないかと思う。

宮地岳の山中に築かれた山城跡に立つと、木立の隙間からゆったりと蛇行しながら流れる宝満川を見下ろすことができる。建設当時の樹木がない時代には、おそらく広く一帯を見渡すことができたはずである。今でも夏から秋にかけて、川の縁辺には鬱蒼と蘆(葦)が生い茂る。千数百年前の昔には、今よりももっと広範囲にその景色が広がっていたことであろう。しかし、時の流れとともに山は深く草木に覆われ、石塁は土砂に埋もれてその姿を隠しゆくにつれ、山城に対する記憶は薄れ、「蘆城」の意味も次第に忘れられていった。その結果、発音だけが伝承され「悪木」「葦木」「安志岐」「阿志岐」などの文字が宛てられるようになったと考えられる。地名表記が変化した類例として俗明院(語源は続命院)、東南冠者^(註9)(同じく童男卯女〈どうなんかんによ〉)などを上げることができる。

山名に至っては、古代末期においてすでに「蘆城」の記憶が薄れている以上、宗祇が「御笠山よりも東」の険しい山と考えたのも無理からぬことである。近世の学者にはそれを否定するに足る史料は知られておらず、ただ『名所方角抄』に追従するほか術はなかった。冒頭に述べたとおり、宮地岳と呼ばれるようになったのは幕末以降であるが、本来はこの山が「蘆城山」だったのではないだろうか。

これまでに所在が確認されている、いわゆる神籠石系山城は記紀などの史料には記載されておらず、古代にまでその名称を遡ることができる山城は知られていない。そうしたなかで、蘆城が城名を伝える地名であるとするならば、正しく希有の例といえるだろう。

ただし、現段階ではこれを正式な城名として採用するには史料に乏しく、あくまでも推論の域を脱するものではないため、遺跡が立地する地名の「阿志岐」をもって城名とすることが妥当であると考えた。

(山村淳彦)



第29図 群生する葦原から宮地岳を望む

註1. 『新編国歌大観』第二巻 角川書店 1984

註2. 『新編国歌大観』第四巻 角川書店 1986

註3. 太宰府神社文書 長和4年(『太宰府・太宰府天満宮史料』巻四)

註4. 太宰府神社文書 延久4年(『太宰府・太宰府天満宮史料』巻五)

註5. 筑紫野市教育委員会編『御笠地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第15集 1986

註6. 『続日本紀』天平12年10月

註7. 『日本古典文学大系』6 岩波書店 1960

註8. 白川 静『字統』1984、同『字訓』1987ともに平凡社

註9. 筑紫野市大字天山(旧)258番地に小字として残る。なお、本市では昭和46年(1971)から小字を廃止しはじめ、御笠地区については同56年(1981)に廃止作業を終えたため、公的な地名としては使用されていない。

第2節 阿志岐城跡における版築土塁の観察について

平成17年度は、城域東端に位置する第3水門に取り付く土塁について、その積み土の状況を具さに観察することができた。得られた情報については本文中に収録しているので併せて参照いただきたいが（本書11～21頁）、検討事項や今後の課題等についてここで述べておくことにしたい。

なお、基底石や列石（及びその裏込め石）と版築土塁の基本構造については、未掘のため現段階では不明である。

今回は版築土種について、構成土種、その混合具合（構成）、混ざり方（堆積状況）を目視で観察し、その積み土方法について類型化を試みた。結果は第4表に示す属性によって分別された。これを、観察した第11トレンチ及び第12トレンチの土層図に色分けしたものが第21～33図である。

阿志岐城跡の版築土塁は、第一に赤粘土を多く使用すること、そして、第11トレンチの3・4段階や第12トレンチの1～5段階のように谷側外端部に粘土系土壌を厚く積み、その土手と地山（花崗岩風化土）との間に粘土と砂質土とを交互に充填するのが特徴である（積み土方法Ⅱ類）。これは、土塁中を浸透する水分を谷側土塁表面に排出しないための配慮かとも考えられる。

また、段階ごとに土塁の谷側端から地山岩盤端までに一本筋が通った赤粘土（粘土系土壌の範疇を含み、必ずしも単純層ではない。）の水平層が存在することが第二の特徴である。これは、第12トレンチの場合、積み土方法の基本はあくまでⅡ類であるのに対して、各段階に1箇所の「通しの粘土」層が認められる。1段階の59層及び63・64層、2段階の47層、3段階の30層、4段階の20・21層がこれに該当すると思われる（第33図）。

これら「通しの粘土」層の評価については、土塁内部の上層から下層への浸透水に対して、下方にいくごとにそれを逡減させるという配慮ではないかとも想像できるが、そこまでの構造上の仕掛けが想定できるのか、現段階ではそれを証明する工学的な所見は得られていない。版築は基本的に水を入れてはいけな構造体であり、施工上も水を抜きながら叩き締める。版築は各土層の筋が通っているのが基本であるから、Ⅱ類の積み土方法がむしろ特殊な阿志岐城流なのであって、そのなかの一層に「通しの粘土」層が見られるからといって、即座に機能論に結びつけるの

積み土方法	I	土層を丁寧に工区全体にほぼ水平に積むもの。典型的な版築層で、粘土系土壌と砂系土壌が互層になっている。	
	II	粘土系土壌を土塁谷側外端部に内側にもたせ掛けて積むもの。そして、その内側に粘土系土壌と砂系土壌を充填するもの。	
層厚	a	薄いもの。	
	b	厚いもの（目視で分層できないものも含む。）。	
土種	分類		典型層（T-12）
	1	赤粘土主体（ほぼ赤粘土単純層）	5段階11層
	2	黄粘土主体（ほぼ黄粘土単純層）	4段階21層
	3	真砂（灰オリーブ）単純層	5段階3層
	α	浅黄色を呈するもの。	
	γ	淡黄色を呈するもの。	
	4	赤粘土ベースに真砂混合土	1段階59層
	α	均一混合	
	γ	不均一で塊状混合	
	5	黄粘土ベースに真砂混合土	4段階20層
	6	真砂ベースに粘質土の混合土	5段階7層
	α	均一混合、白色砂粒が多い。	
	γ	不均一で白色塊状混合。	

第4表 第11・12トレンチにおける積み土方法の類型と版築土種



第30図 代表的な版築土壌

は早計であるかもしれない。その証拠に第11トレンチの積み土方法は3・4段階こそⅡ類が認められるものの、基本的には水平堆積が多く、第12トレンチとは異なった所見となっている。

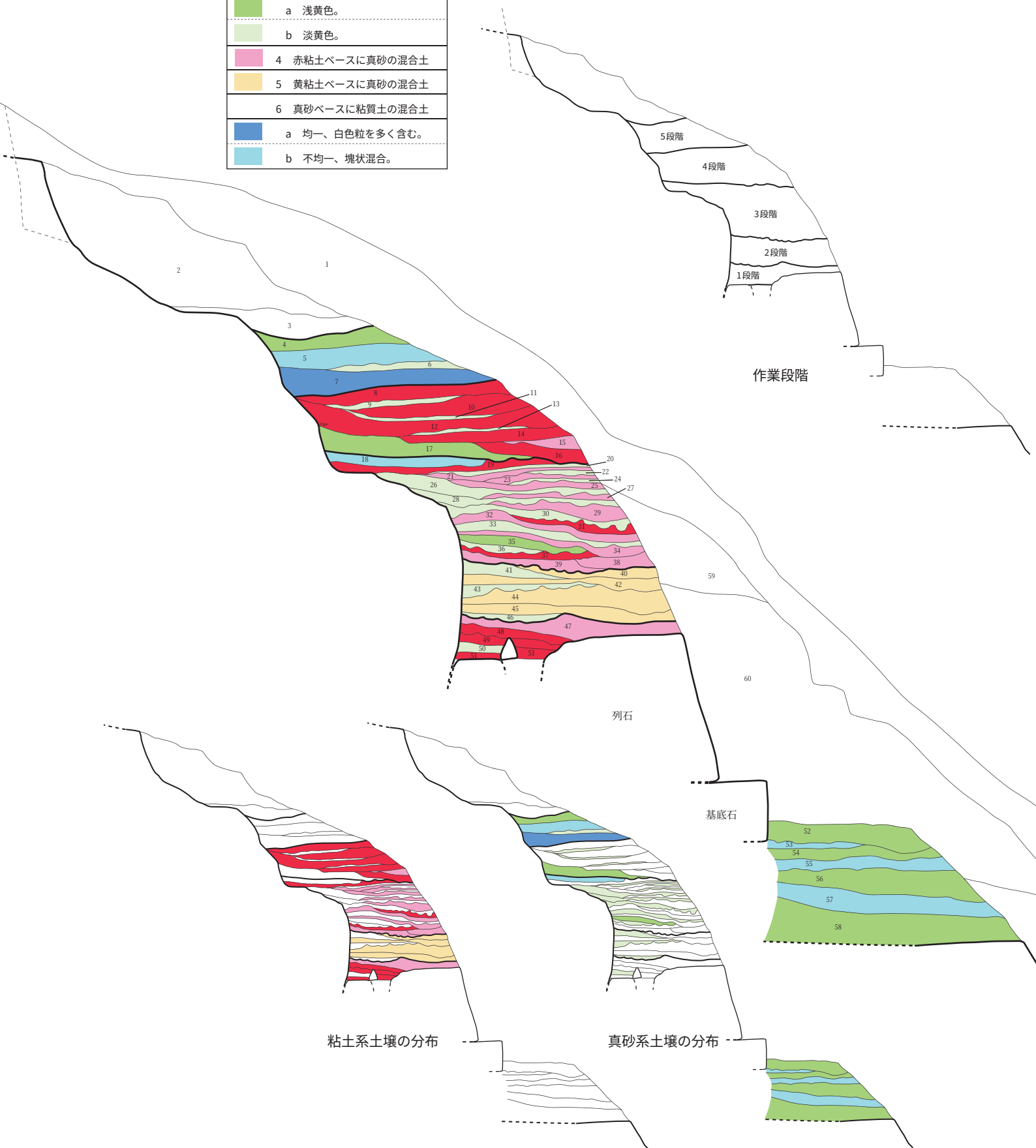
また、極端にいうと地山整形した真砂土の表面に版築の皮を貼り付けたような(化粧のような)土塁施工を呈しており、先の第12トレンチの仮説は第11トレンチでは成立しておらず、これについては今後の議論の余地としておきたい。積み土方法には、非常に薄い版築が工区全体に行われている積み土方法Ⅰ類と、粘土系土壌を谷側外端部に積みその内側に粘土系土壌と砂系土壌を充填する積み土方法Ⅱ類があって、Ⅱ類を多用していることは既に述べてきたが、第11トレンチと第12トレンチの対応では、それが極めて至近距離にありながら真逆になっており用土の方法が全く異なっている(第4表)。これは、両トレンチの間に工区の境界がある可能性も想像でき、今後の他所との比較も含めて今後検討することとしたい。

第11トレンチと第12トレンチは、その版築土塁の構築に5つの段階があって、3段階目で工事上の大きな変化が見られる点は共通する。3段階の凹凸が一番顕著で版築層が薄く丁寧に施されており、工法上・構造上の区切りが見て取れる。第4表に示すように、第12トレンチ南壁1・2・4・5の各段階で積み土方法がⅡ類であるのに対して、3段階のみがⅠ類を採用している。また、第11トレンチでは、南壁・北壁双方とも1・2・4・5の各段階ではⅠ類であるのに対して、3段階のみが逆にⅡ類を採用している。

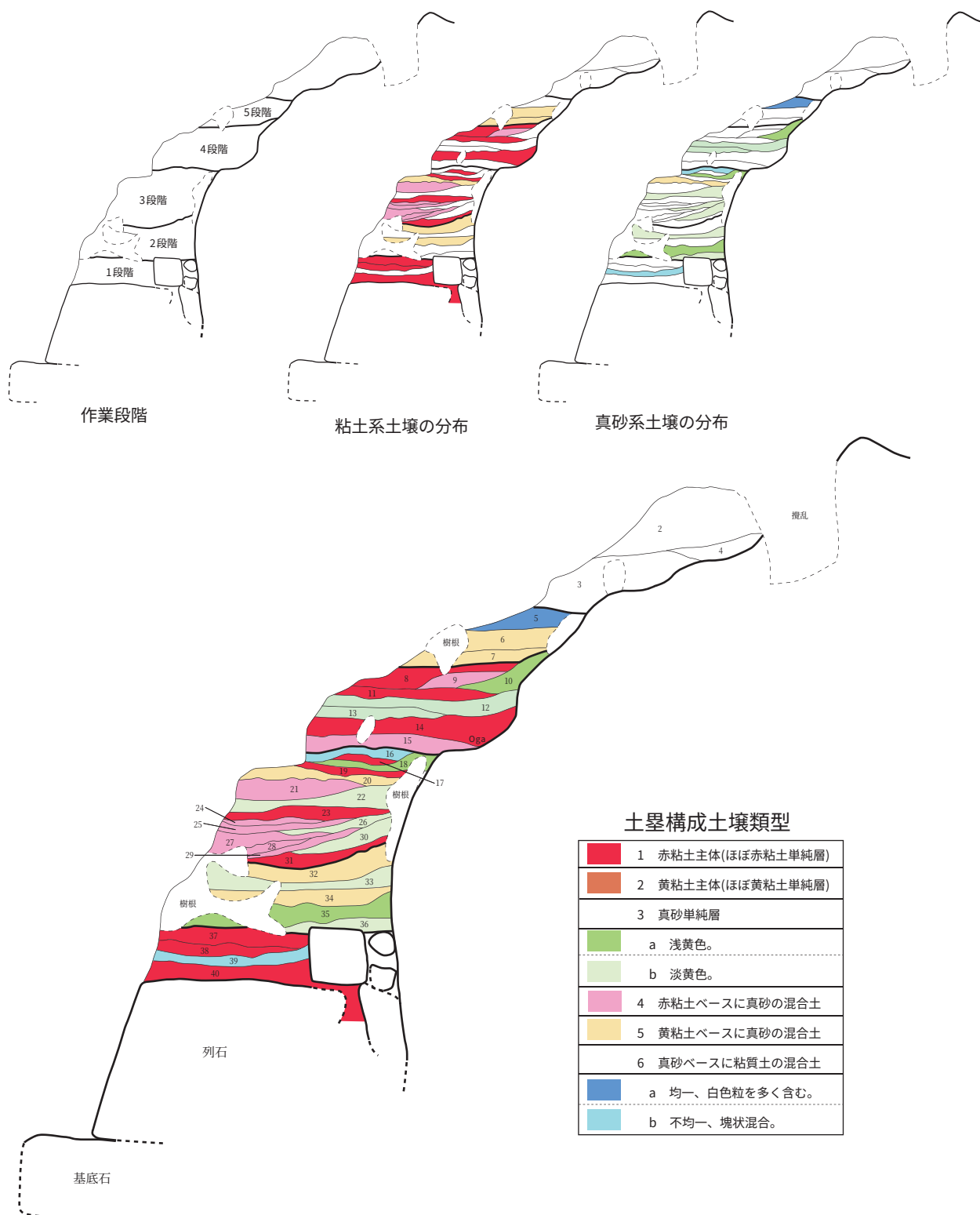
赤粘土及び黄粘土、真砂の用法、混合比等の検証は未だ行っていないため、これらに工法上の

土層構成土壌類型

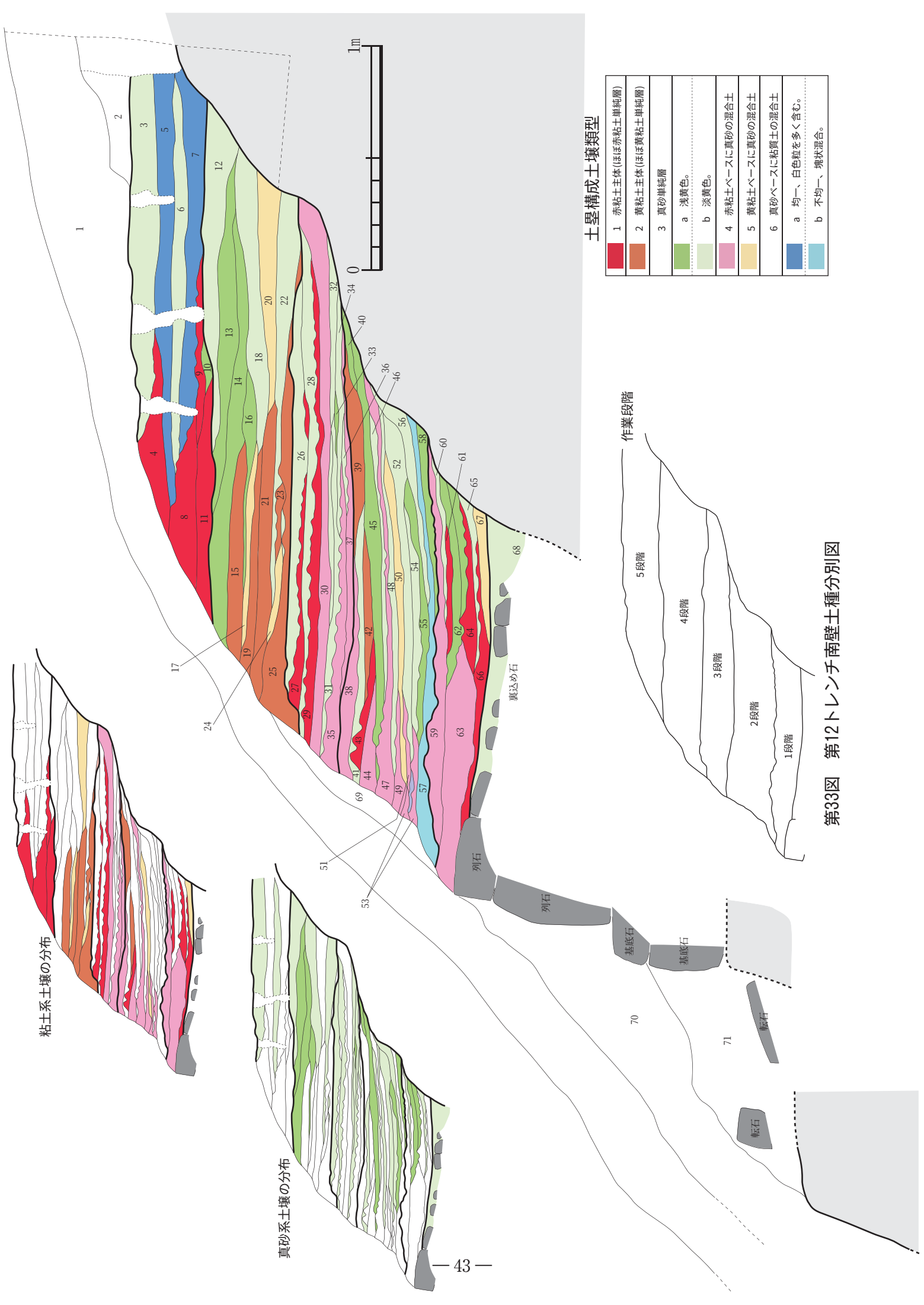
	1 赤粘土主体(ほぼ赤粘土単層)
	2 黄粘土主体(ほぼ黄粘土単層)
	3 真砂単層
	a 浅黄色。
	b 淡黄色。
	4 赤粘土ベースに真砂の混合土
	5 黄粘土ベースに真砂の混合土
	6 真砂ベースに粘質土の混合土
	a 均一、白色粒を多く含む。
	b 不均一、塊状混合。



第31図 第11トレンチ北壁土種分別図



第32図 第11トレンチ南壁土種分別図



第33図 第12トレンチ南壁土種分別図

ルールがあるのか不明だが、施工規模について60cm単位が想定される点を考慮すると、作業上の中間地点が中断テラスと3段階目にあつて構造上の変化を持たせる意味がある可能性がある。

取り止めもなく書き記したが、今後の課題としては、版築土塁に用いられる用土の選択の問題、その土の混合比等に工法上のルールがあるのか。そして、今回の得られた所見が土塁の主軸

(縦方向) に対してどう変化していくのか。阿志岐城跡内での土塁構造の比較も含めて検討したいと考える。以上、土塁だけをとっていても解明すべき点が多い。(小鹿野亮)

段階	T-12	T-11	
	南壁	南壁	北壁
5	Ⅱb-1	I a-5	I a-1・2
4	Ⅱb-3	I a-1	I a-1
3	I a-1	Ⅱa-1	Ⅱa-1・4
2	Ⅱa-3	I a-3	I a-5
1	Ⅱb-1	I a-1	I a-1

第5表 積み土方法分別表

第3節 阿志岐城跡確認調査の総括

阿志岐城跡の確認調査については遺跡の範囲を確定することが主たる目的であり、遺構の調査は限定的な範囲で行ったため、阿志岐城跡の全容を語ることはできないが、調査において得られた所見について総括する。

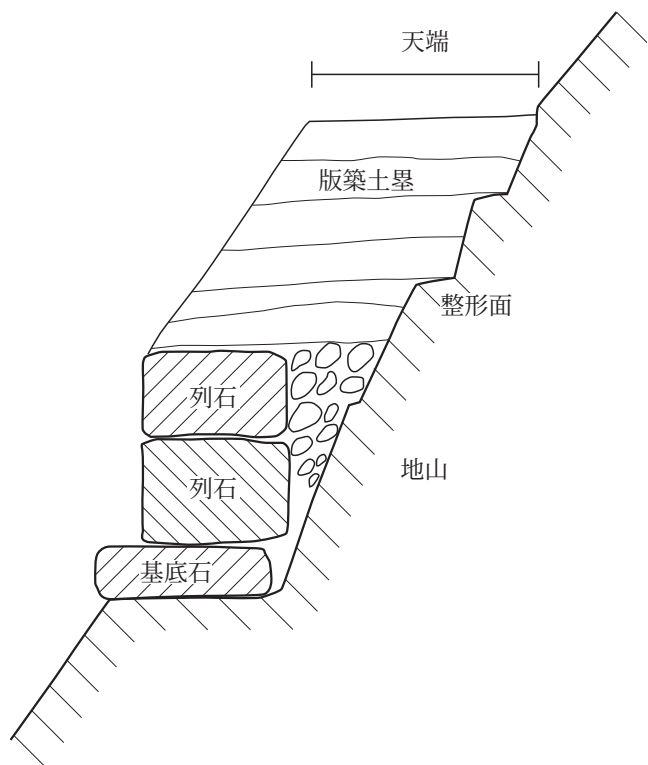
1. 土塁について

土塁は、基本構造として尾根を三段から四段の階段状に地山整形を行い、基礎に列石を並べその上に版築土塁を築く。版築土塁は、尾根の主稜線を残して天端を形成しておりいわゆる「内托法」に依っている。土塁は、全て尾根主稜線から城外側に築造されている。

天端幅は、断面で確認された第12トレンチで約1.6m、第22トレンチは肩部が約3.3mを測るが、第22トレンチは肩部が流れており、推定復原すると約2m程度に収まると思われ、全体的には1.8m前後を測ると思われる。

版築の状況については第4章第2節で検討したとおりであるが、西側城域の第22トレンチと東側城域の第11、第12トレンチでは、赤褐色粘質土の使い方では共通するものの、真砂土層の均一性については大きく異なり、第22トレンチは第11、第12トレンチ程の均一性が見られない。

列石は、方形に整形加工を施した切石を、1～2段に積み概ね60cm～70cmの高さに揃えている。また、この列石を据えるにあたって厚さ20cm前後に加工した扁平な方形の切石を基底石として置き、その上に列石の前面を18cm前後引いて据えている。第12地点の列石崩壊箇所の観察から、基底石の幅の約2倍強の控えがあると思われる。基底石は、日本の古代山城では鬼ノ城角楼に近似する例があるものの、神籠石系山城の列石にはこのような類例はない。列石は、方形に粗割して切り出した石材を敲打により面取加工を施している。また、高さの不均衡を解消するため、切石の角をL字に切り欠いた「切り欠き加工」を随所に施している。列石の加工度は、正面の城域で確認された第12地点が最も高く、ついで東側城域の第2地点がこれに次ぐ。西側城域の第16地点で確認された列石は、切石加工が充分ではなく自然面を多く残している、また、左右の石とのすり合わせも充分ではなく、列石上面の高さを揃えるような加工はほとんどされていない。このように築造が粗雑になる点は、版築土塁においても共通しており西側城域築造の特徴といえる。



第34図 土塁構造模式図

2. 水門について

阿志岐城跡は、3ヶ所の水門が確認されているが、それぞれ築造法は異なっている。

第3水門は、土塁の列石と同様に切石の石材を切り欠き加工を施しながら精緻に積み上げている。第2水門は、大振りの自然石をほとんど加工せずに積み上げている。平面は直線的で、中央付近で折れている。第1水門は、阿志岐城の中心をなす谷である杉の谷川にあり、一部を残して流失しており全容は不明だが、石材は大小取り混ぜて使用しており第2、第3水門と異なり、近世の石積みを想起させる。また、第2、第3水門の前面が若干傾斜を持っているのに対して、第1水門はほぼ垂直に立つ。このような様相から、第1水門が阿志岐城跡に伴う水門とするには疑念が残り、本格的な調査を行う必要がある。

阿志岐城跡における水門は、谷部を遮断する形で築造された石塁であるが、水口等の排水施設は確認されなかった。第1水門は、水門の大半が流失しており、第2水門も中央部附近が崩落していること、水門下部が埋没していることなどから確認できていない。

第3水門は、石塁最下部を検出したが水口等は確認されなかった。石塁上部が流失しており、また、背面の調査を行っていないので断定はできないが、谷底の岩盤に直接石積みを行っており現在も最下部の石積みと岩盤の間から水が通水していることから一定量の排水は可能だったと思われる。

3. 城域について

調査において確認された城域は、第3水門西端部から第22地点まで、杉の谷川を中心にコの字形に巡る土塁線に囲まれた範囲である。土塁線は、その立地から二つの様相に分けられる。その一つは、尾根の先端部を水平に蛇行しながら巡る土塁線で、正面の城域を形成する。もう一つは、尾根の主稜線に添って築造される土塁線で、西側と東側の城域を形成する。

正面の城域は、標高140m～150m（沖積面との比高差約100m）附近をほぼ水平に築造されており、両端の直線距離約450mの城域を形成する。東側の城域は、その東端から標高約250mの第1地点まで尾根を平均斜度約22°で遡上し、直線距離約250mの城域を形成する。また、第3水門から宮地岳山頂までは直線距離で約350m、第3水門と山頂部の比高差は約98mである。西側の城域は、第16地点から第22地点まで平均斜度3°、直線距離で約180mの城域を形成する。第22地点から山頂西側のピークまでは直線距離で約500m、比高差約134mを測る。宮地岳山頂から西側のピークまでは、直線距離で約350mである。

確認された土塁の総延長は、第1地点から第22地点まで1,338mを測る。この両地点間は、約400mで、両地点を結んだ城域内の面積は74,637㎡である。

土塁が確認できなかった山頂までは、東西の土塁線が尾根の主稜線から数m城域の外側に降ったところを主稜線とほぼ並行に遡上していることから、その特性を踏襲して宮地岳山頂から山頂西のピークを取り巻く線を想定した。

阿志岐城跡が、神籠石系山城で云うところの「包谷式」であることから、杉の谷を中心に山頂までの谷を包括する尾根線の範囲を城域と想定した。想定線は、築城意図として意識されることが推測されることから、土塁等の遺構の有無にかかわらず「見なしの城域」として位置付けられる。想定線の総延長は2,338mで、確認されている土塁線とあわせると総延長3,676mで、想定城域内の総面積は163,568㎡である。

本城の主要地点における世界測地系座標値並びに経緯度は、第6表に示す。

	第22地点	第3水門	第2水門
X座標	54506.098m	54603.799m	54754.15m
Y座標	-40533.056m	-40148.017m	-40335.213m
北緯	33°29'26"	33°29'29"	33°29'34"
東経	130°33'49"	130°34'04"	130°33'57"

第6表 阿志岐城跡主要箇所座標・経緯度一覧表

4. 阿志岐城跡の立地について

宮地岳は、ほぼ円錐形の山で二日市地峡帯に突き出た位置にあり、西は二日市地峡帯、南は朝倉平野に面しており、宮地岳が面する北は宝満川によって形成された御笠平野に面している。山頂に立てば有明海から博多湾まで見通すことができ、時期的問題はあるにしても、大野城、大宰府政庁、水城、基肄城、高良山神籠石など古代の重要な遺跡が一望できる。

しかし、城域本体は、宮地岳北側山腹に位置しその正面は御笠平野の最奥を向いている。

正面には、蘆城駅家跡と推定されている御笠地区遺跡A地点が城域の真正面に当たり、蘆城駅家跡を分岐点として、北西の石坂峠を越えれば大宰府政庁に達し、北に向かえば米の山峠を経て筑豊に入る古代の「田河道」に面しているが、正面の城域からは二日市地峡帯を見通すことができない。言い換えれば、米の山峠から降りてきて御笠平野が広がったとき初めて阿志岐城が現出する。また、同じく太宰府から石坂峠を降って御笠平野を見たとき正面に阿志岐城が現出することになり、本城が両峠を睨む位置を選地していることは明らかであり、このことが築城意図の重要な要件の一つであったことは間違いのないであろう。

城域の正面を御笠地区遺跡A地点から見た景観を復原すると第35図に示すように見えていたと思われる。画像中、左下の市道交差点付近が御笠地区遺跡A地点で、やや高度を取った俯瞰である。当時は、列石と版築土塁が一体となった構造物である土塁が、水平な帯となって宮地岳の山腹に築かれていたことが想像される。第36図は、二日市地峡帯から御笠平野に入ってくるルートにあたる太宰府市高雄附近からの俯瞰である。この位置からは、正面の城域はほとんど見えず、西側の城域が俯瞰されていることが看取される。

特に第35図を詳細に見ると、土塁を実際に築造した部分は、正面からはっきりとラインを見て取れるが、推定線の部分は実際に土塁が築造されていたとしても平地からの見通しは良くなかったと思われる。このような、低地からの見通しが築造する範囲を決める要素として大きかったのではないかと考える。



第35図 阿志岐城跡俯瞰図（CG）御笠地区遺跡A地点付近より



第36図 阿志岐城跡俯瞰図（CG）太宰府市高雄付近より

第5章 結 語

城域の測量と範囲確認のための調査で判明した主な成果は以下のとおりである。

- ① 遺跡は、標高338.9mの宮地岳北西の山腹に立地する。
- ② 本城は、遺跡所在地の地名から「阿志岐城」と命名した。
- ③ 本城は、官選史書はもとより、その他の史料にも記載がなく、列石を伴う土塁と切石を多用した石塁によって築かれた水門などの構造の特徴から、神籠石系の古代山城跡と考えられる。
- ④ 本城は、杉の谷を主谷とした「包谷式」である。
- ⑤ 城域は、土塁によって区画され、正面と東西の三方をコの字形に形成している。
- ⑥ 城域の正面幅は約450m、東側の城域は約250m、西側の城域は約180mを測る。
- ⑦ 正面の城域は標高約140m～150mをほぼ水平に構築されており、第3水門とは比高差約100mを測る。
- ⑧ 確認された土塁線は、総延長約1.34kmで、山頂まで囲堯する想定線の総延長は約3.68kmで、想定城域内の総面積は約16.35haである。
- ⑨ 土塁は、基部に列石を伴う版築土塁で、確認された土塁は全て内托式である。
- ⑩ 土塁線の屈曲は、「折れ」構造で水門においても同様の構造をもつ。
- ⑪ 列石は、精緻な方形切石加工を施し、面取りには敲打調整を行っている。また、切り欠き加工が用いられている。
- ⑫ 列石の石積構造は、列石の面から約18cm前後の張り出しをもつ扁平な加工石を基底石として用いている。
- ⑬ 城域内に石切場が確認されたが、その開始時期は不明である。
- ⑭ 土塁の版築には、赤褐色粘質土と真砂土を使用し、粘質土を土塁前面に厚く後に薄くひきならし、版築の際の真砂土の流失、崩壊を防いでいたと思われる。
- ⑮ 土塁築造の際には、列石前面に柱痕が確認されたが、柱痕の間隔や、背後の柱痕等は確認されていない。

以上、主な成果について列記したが、従来瀬戸内型といわれていた土塁線の折れ構造や、国内の神籠石系山城には類例を見ない列石の基底石、本城遺構中、最大規模の構造物である第3水門が、城域の最東端にあたり土塁線がとぎれること、山頂部の俯瞰を別にして、城域の正面はきわめて限定的な範囲を対象としていることなどが、阿志岐城の特徴としてあげられる。その意義が、他の古代山城との比較研究の中で解明されることを期待する。

最後に、阿志岐城を発見された中島聡氏、調査にあたっご指導を賜りました調査指導委員の先生方、文化庁、福岡県教育委員会の皆様方、国内外の古代山城の情報をご提供いただいた向井一雄氏と古代山城研究会会員をはじめとする多くの皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

また、寒風吹きすさぶ中、十分な設備もない山中での調査に従事していただいた作業員の皆様には、心から感謝いたします。そして、阿志岐城発見時の区長であり、阿志岐の宝として保存していきたいとの思いから、先頭に立って調査に参加してこられた中阿志岐の森茂氏が本書の完成を見ることなく永眠されました。本紙面をお借りして慎んでご冥福をお祈りいたします。

1. 宮地岳山頂付近より
基肄城を望む



2. 宮地岳山頂付近より
宝満山を望む



3. 第5地点列石全景

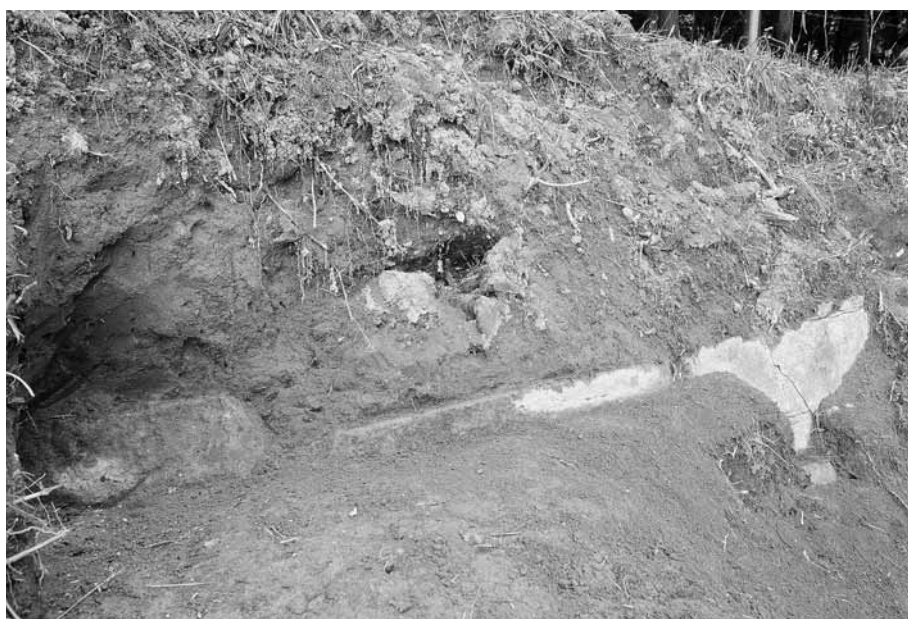




1. 第5地点列石
(西から)



2. 第4地点列石全景



3. 第6地点列石

1. 第7地点列石全景



2. 第7地点列石前面
覆土状況



3. 第7地点より
第6地点方向を望む





1. 第2水門遠景



2. 第2水門前面



3. 第2水門全景

1. 第12地点土塁
(南より)



2. 第12地点土塁
(北より)



3. 第12地点土塁
(正面より)





1. 第13地点列石



2. 第14地点列石



3. 第1水門石罫

1. 第1水門遠景



2. 城域外東側尾根現況



3. 第14トレンチ掘削
状況





1. 第21地点土塁天端
現況



2. 第23トレンチ列石
検出状況



3. 第23トレンチ列石
前面検出状況

1. 第27トレンチ
調査前現況



2. 第27トレンチ調査後



3. 第24トレンチ露頭石
検出状況





1. 第3地点土塁天端



2. 第2地点土塁全景



3. 第2地点土塁近景

1. 第3地点土塁全景



2. 第3水門天端落石
状況

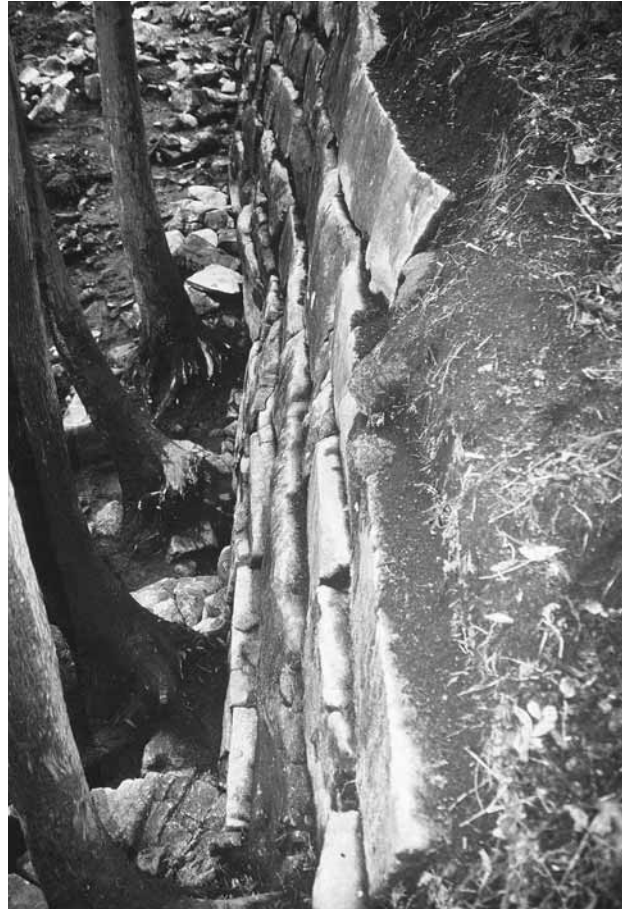


3. 第3水門東端部拡大





1. 第3水門側面全景



2. 第3水門石塁西端部控え積み状況



3. 第3水門石塁挟り込み加工石

1. 第3水門西端最下部



2. 第3水門石塁
切り欠き加工①



3. 第3水門石塁
切り欠き加工②





1. 第3水門石塁
切り欠き加工③



2. 第3水門石塁
切り欠き加工④



3. 第3水門石塁
切り欠き加工⑤

1. 第3水門石壘前面
落石状況



2. 第3水門石壘崩落石



3. 第3水門前面採集
粗割剥片





1. 第3水門石塁崩落石
(正面)



2. 第3水門石塁崩落石
(上面)



3. 第3水門石塁崩落石
(側面)

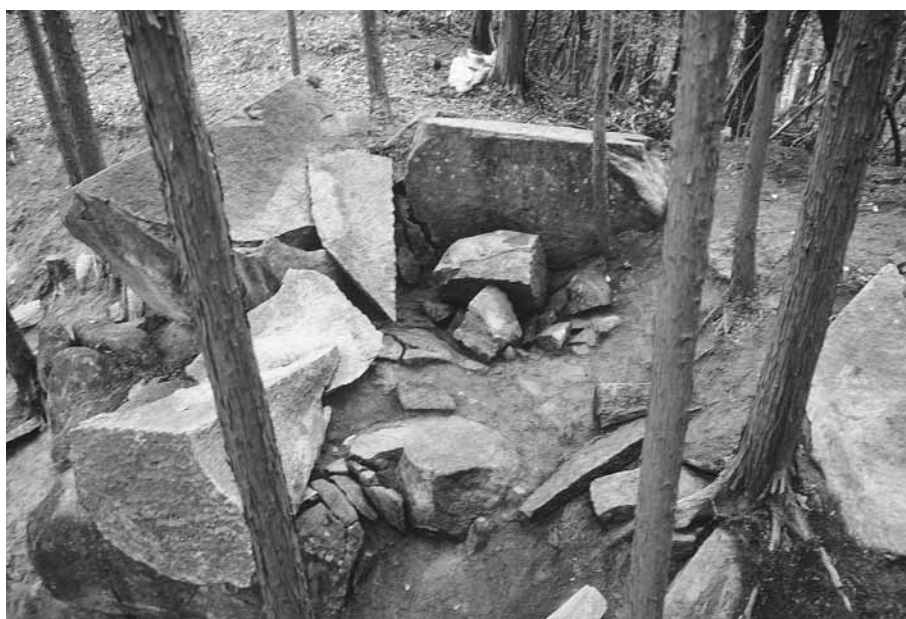
1. 石切場全景



2. 石切場花崗岩露頭



3. 石材切り出し跡





1. 石材散乱状況



2. 石材切り出し残材①



3. 石材切り出し残材②

1. 矢穴痕が残る石材



2. 石切場南側尾根
主稜線



3. 第29トレンチ全景





1. 第30トレンチ全景



2. 第31トレンチ全景



3. 第32トレンチ全景

1. 第33トレンチ全景



2. 第34トレンチ全景



3. 第35トレンチ全景





1. 馬の背状鞍部土塁
全景

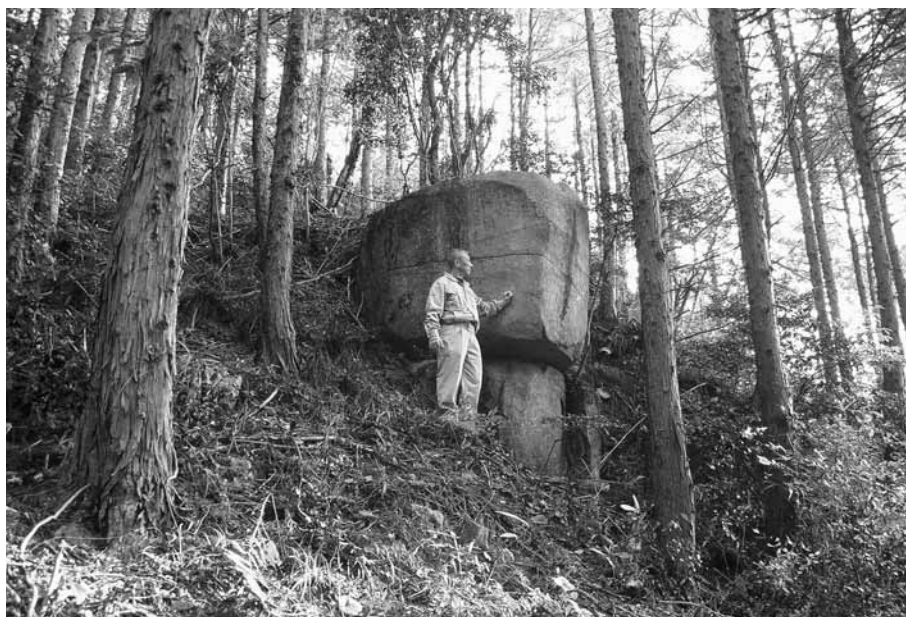


2. 第37トレンチ全景



3. 第37トレンチ土塁
断面

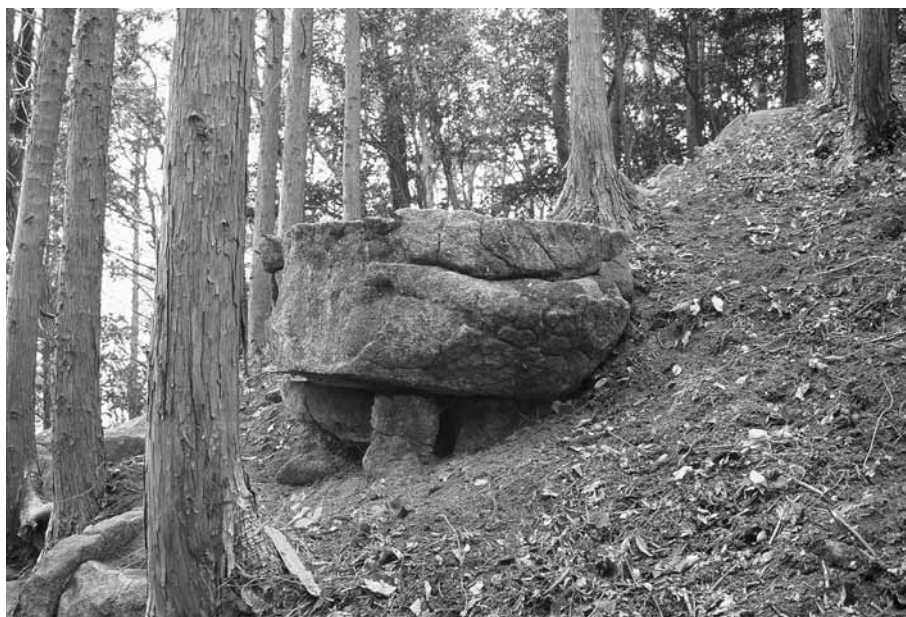
1. 花崗岩の露頭①
(第32トレンチ南)



2. 花崗岩露頭②
(第30トレンチ東南)



3. 花崗岩露頭③
(第30トレンチ東南)





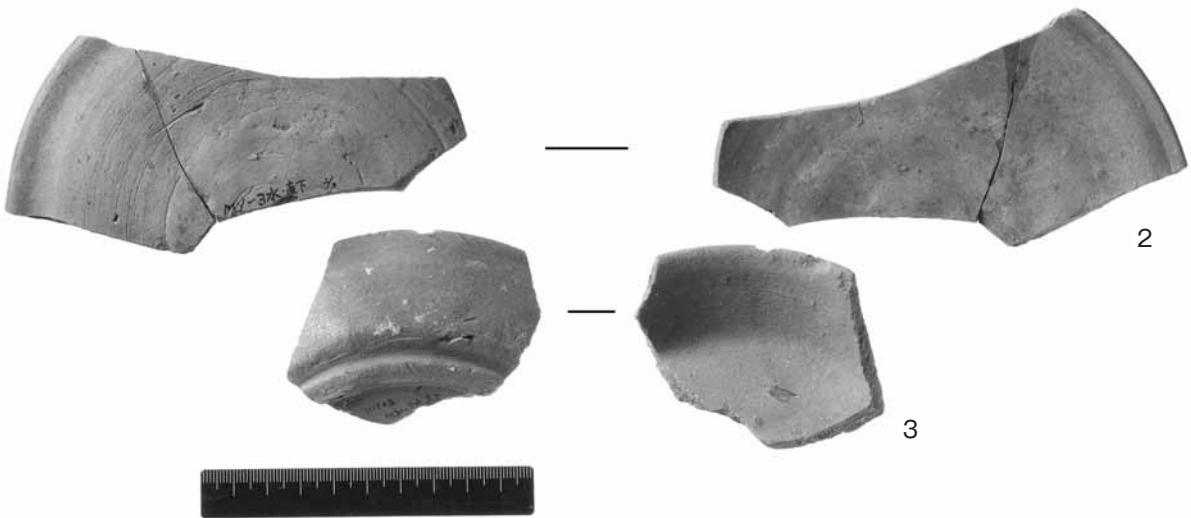
1. 第3水門遺物出土地点



2. 第3水門遺物出土状態（遺物No.2）



3. 第3水門遺物出土状態（遺物No.3）



4. 第3水門下位表土中からの出土遺物（岩盤直上）



1. 第3水門下位表土中からの出土遺物(外)



2. 第3水門下位表土中からの出土遺物(内)



3. 第3トレンチ表土中の出土遺物 (左：内面、右：外面)

報告書抄録

[illegible]

阿 志 岐 城 跡

阿志岐城跡確認調査報告書

筑紫野市文化財調査報告書

第 92 集

平成20年 3 月

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会
〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1-1
T E L 092-923-1111(代)
F A X 092-923-9644
URL <http://city.chikushino.fukuoka.jp>

印 刷 大 同 印 刷 株 式 会 社
〒849-0902 佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20
T E L 0952-71-8520(代)
F A X 0952-71-8528
URL <http://www.daidou-jp.com>

阿志岐城跡全体図

